Ⅱ．出版記念シンポジウム記録

開会、ごあいさつ

司会（佛圓）

本日はお忙しい中、お集まりいただきまして誠にありがとうございます。ただ今より、『地方暮らしの幸福と若者』の出版記念シンポジウムを開催いたします。私は、本日進行役をいたしますマツダ財団の佛圓と申します。よろしくお願いいたします。

それでは初めに、マツダ財団常務理事 魚谷滋己より開会のご挨拶を申し上げます。

マツダ財団常務理事（魚谷）

みなさまこんにちは。お忙しい中、ようこそお越し下さりありがとうございます。これよりマツダ財団主催の轡田竜蔵先生 出版記念シンポジウムを開催いたします。

どうしてマツダ財団が轡田先生のシンポジウムを開催するのだろう、と疑問をお持ちの方もおられるかと思いますので経緯をお話しいたします。

今日こちらに持参いたしました新聞、2013 年 10 月 2 日付の新聞記事（手元で示しながら）のオピニオンという記事で轡田先生の存在を知りました。2013 年になった頃から、マツダ財団でも若者に関する事業を考えていきたいな、と思っていた頃にこの新聞記事と出会いました。若い人のことは分かってはいるつもりでしたが、記事を読んでみると、若者に対するイメージとまったく異なっていたことに驚き、私から轡田先生へ会って話が聞きたいです、とメールを出しました。倉敷へ伺い、記事の内容が、轡田先生が自らの足で岡山県の若者のデータを取られたものがベースとなっていることを知りました。岡山県ではなく広島県で調べた場合は同じ結果になるとは限りませんので、広島での実態を調査してもらえませんか、とお願いしました。轡田先生に快諾いただきまして、広島県の三次市と府中町で「広島 20-30 代住民意識調査」を行いました。以上が簡単な経緯となり、調査結果を分析したものが今回のご著書出版に繋がり、シンポジウムを開催する運びとなりました。一方マツダ財団は、調査を軸とした様々な検討や先生からの助言も得て、「若者×ツナグバ」という新しい事業を今年の 4 月から始めます。

私自身も今日のシンポジウムを楽しみにしておりました。まずは第 1 部に著者である轡田先生をお迎えし、出版記念シンポジウムを開催させていただきたいと思います。

第１部　講演　『地方暮らしの幸福と若者』

吉備国際大学准教授　　轡田　竜蔵氏

日本の若者研究の文脈と、「地方暮らしの幸福」に関する議論の文脈とをかけ合わせた問題意識から出発し、地方暮らしの諸側面を総合的に捉え、その社会的課題を考察する。広島県内の「地方中枢拠点都市圏」（安芸郡府中町）と「条件不利地域圏」（三次市）の２つの自治体の若者（20～30 代）への質問紙調査とデプス・インタビュー調査から答えを探る。

講師は、吉備国際大学社会科学部准教授の轡田竜蔵氏である。轡田氏は、2005 年以降、中国地方に暮らす若者への調査を継続して実施。2015 年、広島県安芸郡府中町と三次市の若者を比較する『公益財団法人マツダ財団委託研究 広島 20-30 代住民意識調査報告書（統計分析篇）』を刊行。若者論が東京、大阪など大都市での研究に基づいて語られがちな中で、地方に暮らす若者に焦点を当てたい、と 2017 年２月に本著を刊行。これまでにない独自の視点から執筆した内容となっている。

司会（佛圓）

第１部は『地方暮らしの幸福と若者』の出版記念講演としまして、著書である吉備国際大学准教授の轡田竜蔵先生に基調講演をしていただきます。轡田先生、よろしくお願いいたします。

（拍手）

スライド

講演要旨

（スライド1）

吉備国際大学の轡田竜蔵です。今日はこのような大きな場を作っていただきありがとうございます。岡山の山奥にある吉備国際大学、広島で言うと安芸高田市のような感じの土地に勤務しています。住まいの倉敷市から毎日1時間かけて電車で通っています。

今日もいらしていただいている府中町と三次市の方々が、初対面の頃より温かくじっくりと受け入れて下さり、『地方暮らしの幸福と若者』を出版することができました。

本書成立の経緯

・2004年 吉備国際大学に着任。

・2005年 担当授業「社会調査実習」で地方暮らしの若者を対象にした調査を開始。以下、毎年度実施。

・2011年 地方X大学の出身者を追跡調査した論文「過剰包摂される地元志向の若者」を発表。（樋口明彦他編『若者問題と教育・雇用・社会保障』所収、法政大学出版局）

・2011～2012年 阿部真大氏が「社会調査実習」に参加。そのデータをもとに『地方にこもる若者たち』を刊行。

・2013年 中国新聞「言」欄にインタビュー記事が掲載。

・2014～2015年度 マツダ財団委託研究「広島20~30代調査」を実施。質問紙調査は2014年7月に実施。デプス・インタビュー調査は同7月から1年半の間に実施。

2

（スライド 2）

スライドのような経緯により、2つの自治体の若者への質問紙調査とインタビュー調査が実施でき、この本は出版できました。みなさんの力添えに感謝しております。

本書の趣旨

若者研究の「サイレント・マジョリティ」としての「地方暮らしの若者」に光を当てる。豊富な社会調査データから、地方暮らしの幸福に注目が集まる時代を検証する。

【論点】

1、地方暮らしの若者をどう描くか？

2、地方の「まち」と「いなか」を比較する意義

3、暮らしや人生の現状評価

4、地域移動/地元定住の問題

5、ライフスタイルの問題

6、働き方の問題

7、社会関係の問題

3

（スライド3）

研究から分かったこと、議論したいことを7つの論点にまとめました。

日本のメディアが描く若者研究というのは、東京や大阪といった大都市の若者が圧倒的に多く、地方の若者があまり議論されてきませんでした。ひどい場合、地方の若者はみんな「ヤンキー」だと一まとめにされてしまいがちです。拙著は、そうした地方暮らしの若者の描き方への違和感から出発しています。

【論点1】地方暮らしの若者をどう描くか？

●これまでの「地方暮らしの若者」論

1、「社会的排除モデル」（人口流出・コミュニティの溶解にともなう若者の貧困化・孤立化に注目するモデル）

2、「社会的包摂モデル」（若者の地方移住・地元定住傾向を地域活性化につなげて解釈する「地方暮らしの幸福論」）

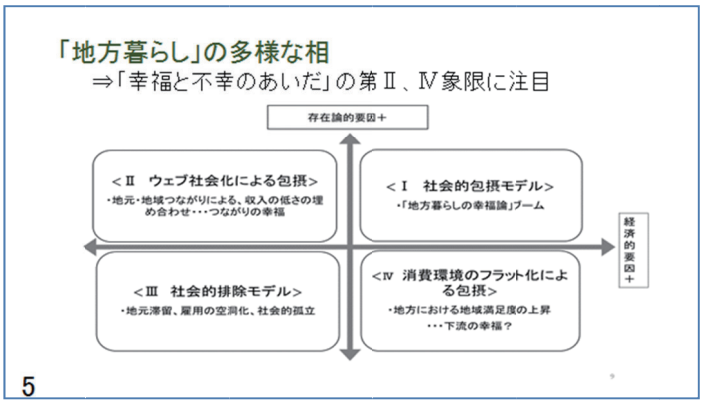
●拙著の方法

悲観論でも楽観論でもなく、若者の生活や人生を制約している要因を分析し、その取り得る選択肢を広げることを目指す「潜在能力アプローチ」（アマルティア・セン）。

4

（スライド4）

従来、地方暮らしの若者は都会や町を目指す傾向が強いと言われてきました。ですが最近は、若者の地元志向や、地方に幸せを求めるようになった傾向が注目されています。でも、本当にそうでしょうか。地方は大都市より幸福だという議論を耳にしますが、実際の暮らしが本当に心地よいものだろうか、という部分を検証することが狙いでした。



（スライド5）

話を理論的に整理します。これまでの地方は、ポジティブとネガティブの両極に描かれがちでした。

＜Ⅲ社会的排除モデル＞　地方経済の衰退もあって、貧困化や孤立化が連鎖し、次第に追い詰められてしまう、という若者像があります。

一方、＜Ⅰ社会的包摂モデル＞「地方はそんなに暗くなく、都会より楽しい場所になってきている。」という地方暮らしの幸福に焦点を当てる動きもあります。数年前の番組「あまちゃん」が典型的でした。都会よりも岩手の方が地元つながりで楽しい、という話です。

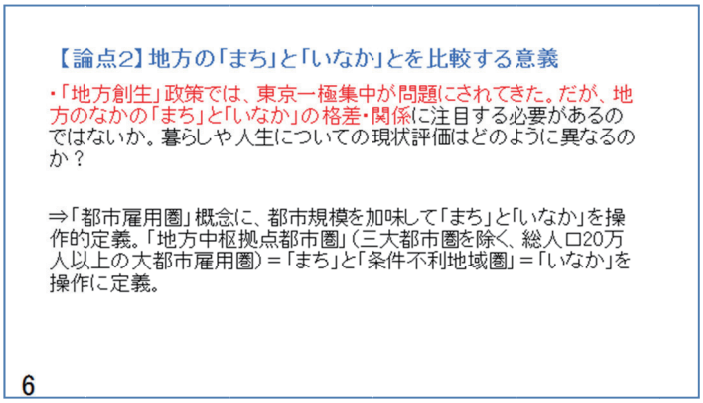
田舎暮らしや地方移住がトレンドになってはいますが、私の立場は、悲観論でも客観論でもなくて若者個人に焦点を合わせたいというものです。地方と田舎のどちらが幸福なのか、という議論に簡単には答えが出ず、一人一人の社会的属性の違いに着目する必要があります。個々人が何を求めているのか？将来何をやりたいのか？夢を制約している要因は何か？等々を分析し、その人の選択肢を広げていきたいと思っています。潜在能力アプローチというものです。地方暮らしの幸福論では、「足るを知れ」＝現状に満足する、与えられたもので我慢しなさい、と言われることがあります。団塊世代が好きな言い方ですが、若者世代にはあまり受けません。「足るを知れ」という前に少しでも選択肢を増やすことを目指す、というアプローチをしていきたいです。

私が注目したいのは、「幸福と不幸のあいだ」です。

＜Ⅳ消費環境のフラット化による包摂＞　ショッピングや消費環境が充実し、

他に行かなくても格差を感じなくなっていることです。この本では府中町のイオンモールが象徴的で、その存在により地域満足度が高くなり、東京などの大都市に買い物行くモチベーションがなくなってきています。ショッピングモールで満足していいのか、という議論もあり、「下流の幸福」と批判的に言われる方もいます。

＜Ⅱウェブ社会化による包摂＞ スマホやパソコンで簡単に社会と繋がることができ、色々な可能性を増やしています。人の少ない田舎に住んでもスマホを使って遠くの友達と繋がることができ、孤立しない、という状況ができています。多少収入が少なくても、友達付き合い、地元付き合い、地域繋がりを通じて満足度の高い暮らしができています。そのような生活にも「収入が低い、経済的な基盤が不安」と言った大きな課題は残ります。



（スライド6）

二つ目の論点として、地方を一括りにしない、ことが挙げられます。地方の「まち」と「いなか」では状況が大きく違っています。地方創生政策では、東京一極集中が問題になり、東京から地方に人口を移すべきだと議論されます。人口減少の問題で言うと、今日の会場付近の本通りや先ほどの府中町のイオンモールには若者や子育て世代がたくさんいます。一方、三次市やその近隣へ行くと、本当に人がいなくて、状況は全く異なります。地方の中の「まち」と「いなか」の格差に注目することが大切で、議論をする上では「まち」と「いなか」を定義する必要があります。

地方中枢拠点都市圏／条件不利地域圏

7

（スライド7）

この本では「まち」を地方中枢拠点都市圏、「いなか」を条件不利地域圏と呼んでいます。地方比較では都道府県比較が多く、例えば島根県と広島県ではどうでしょう、というようなものです。大きさも何もかもが異なるものを並べて県ランキングを作る企画がありますが、あまり意味がないと思います。それよりも地方の「まち」と「いなか」がどのように違うのかをしっかり議論していきたいです。

この地図を見ると広島の都市雇用圏が大きいですね。安芸高田市も含めて広島市圏です。岡山市圏はもっと大きくて私の住んでいる倉敷市もこちらに含まれます。

都市雇用圏とは平日の生活圏です。例えば、広島市圏の外側にいる人は10％以下しか広島市に通っていない、ということを示します。

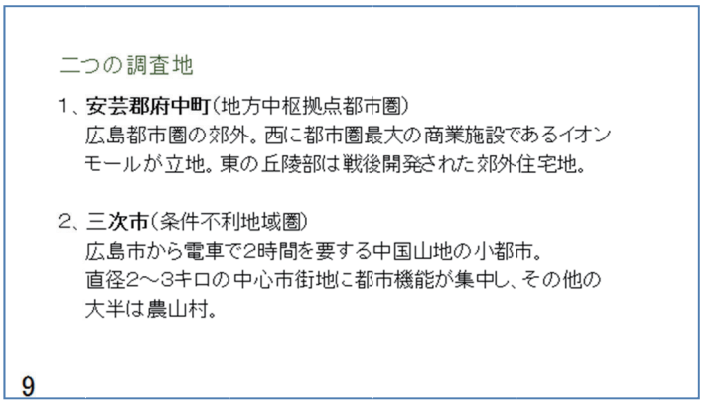
人口比予測（2010⇒2040）

	2010年（国勢調査人口）	2040年（社人研予測）
三大都市圏	45．1％	48．1％
地方中枢拠点都市圏（20万人以上）	34．3％	37．1％
条件不利地域圏	20．6％	14．9％

8

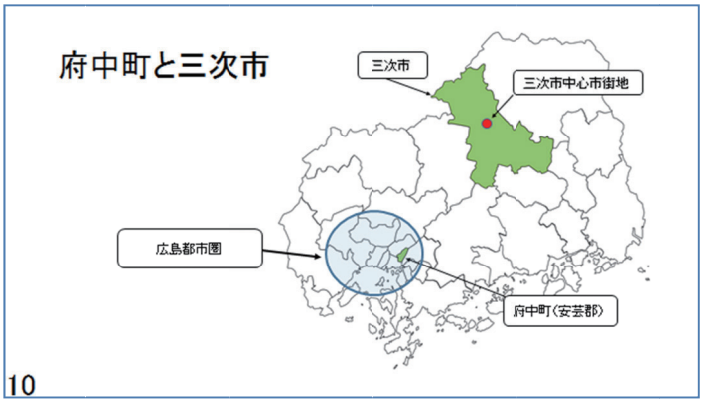
（スライド8）

人口が減っているとよく言われますが人口比で考えるとどうでしょうか。三大都市圏の人口比が増える、というのはよく言われることですが、地方中枢拠点都市圏も同様に増えています。減るのは条件不利地域圏＝地方の「いなか」だけです。地方の「まち」と「いなか」の関係を見直すのが1つのポイントだと考えます。



（スライド9）

本では、安芸郡府中町と三次市を「まち」と「いなか」それぞれの代表として取り上げて調査しました。



（スライド10）

今日は広島の方が多いので説明はあまり要らないと思いますが、位置関係はこちらの通りです。

（スライド11）

広島駅前福屋から見た府中町方面です。丘陵地に這うように住宅地がある部分が府中町で、広島県の特徴的な立地です。

（スライド12）

イオンモール広島府中の写真。今は増床しているので少し雰囲気が違います。若い世代が住むにはとても人気の場所です。

（スライド13）

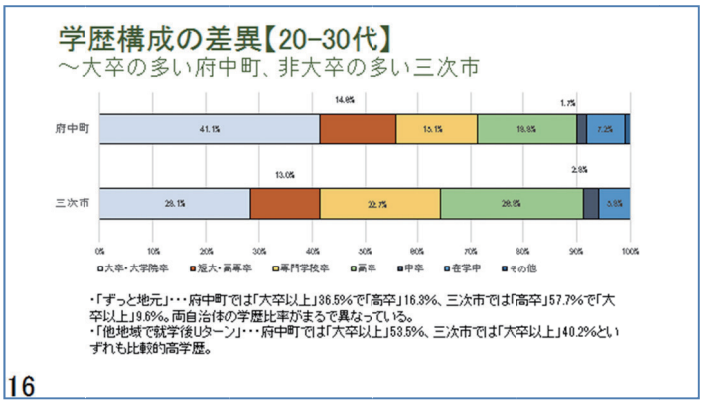
山に貼りつくように広がる丘陵地の写真を新幹線から撮影しました。同じ府中町でも、このあたりは開発時期が古く、高齢化が進んでいます。

（スライド14）

ここからは三次市です。「まち」に見えますが、この写真が市街地のほぼ全てです。CCプラザというショッピングセンターが消費秩序の中心です。若い人はスーパーには寄るけど、服はこちらでは買わない。車で1時間半かけてイオンモール広島府中へ服を買いに行く人が多いです。

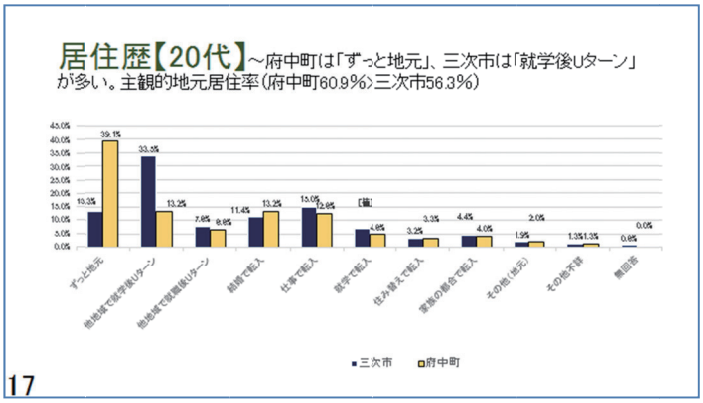
（スライド15）

三次市全体のなかで、市街地に住む20～30代は約3分の2。でも、面積としてはごくわずかで、ほとんどは写真のような農村、山村地帯です。



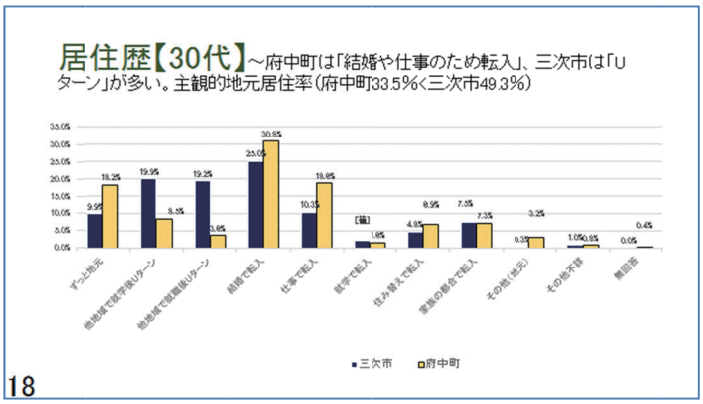
（スライド16）

府中町と三次市との間にはいろいろな違いがあります。学歴を比べると、府中町では大卒が41.1%に対して三次市では28.1%です。三次市では高卒と中卒を合わせると29%ですから、大卒よりも多いです。



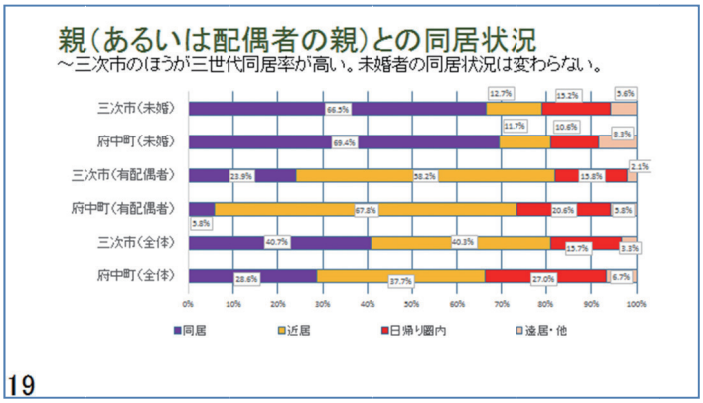
（スライド17）

居住歴では、府中町の「ずっと地元」割合が39.1%と高いです。



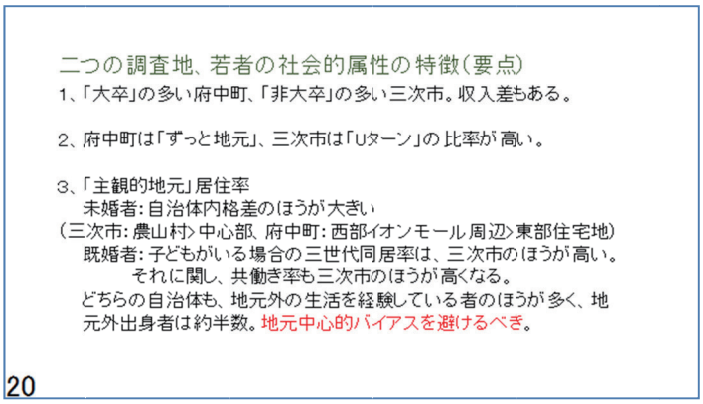
（スライド18）

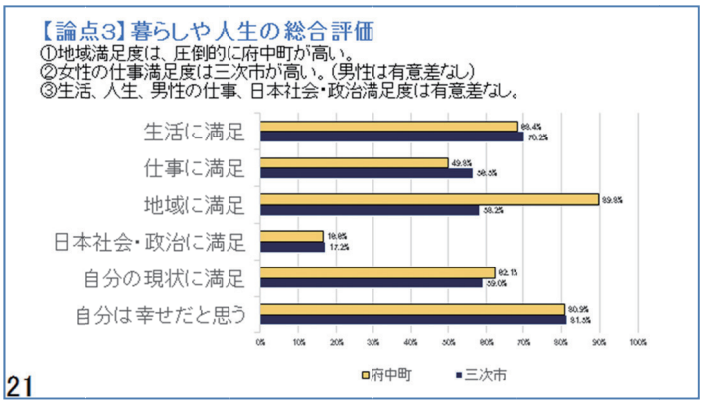
三次市には大学や専門学校がないため、Uターン層が大多数です。



（スライド19）

三次市では結婚したら三世代同居が多く23.9%、府中町は5.8%です。一方、未婚者の状況は両者あまり差がないようです。府中町は丘陵地の団地には未婚者が親と同居していることも多く、一方、イオンモール広島府中の周辺は若いファミリーが多くなります。三次市では、中心部は単身者も多いですが、農村部では親との同居が多数を占めています。





（スライド20）

社会的属性の中で大切なことは、地域には地元の人ばかりではない、ということです。今住んでいる地域が地元だと捉えている人はおよそ半数です。転入層、地元外出身者も多く、地元ではない土地で生活した経験を持っている人も多い、ということを頭に入れる必要があります。

（スライド21）

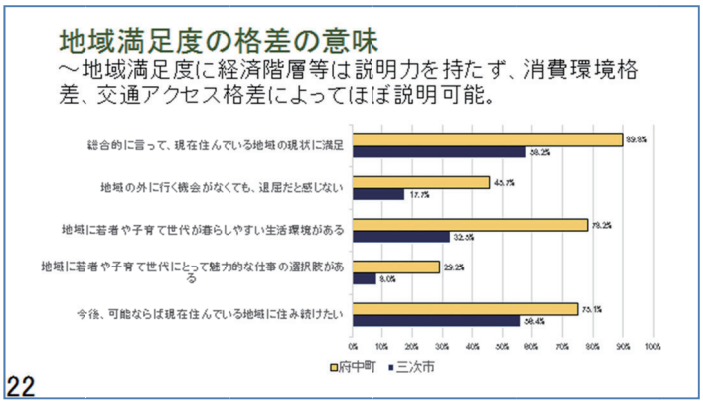
論点3として暮らしや人生の総合評価があり、アンケート調査の中で幸福度や満足度を尋ねています。大きな項目として、生活・仕事・地域・日本社会や政治・自分の現状への満足度があり、それらとは別に自分は幸せだと思うかどうか、という質問があります。

府中町と三次市で差が大きい箇所が1つあります。それは地域満足度です。30％程度という圧倒的な差で、府中町の方が満足度は高いです。イオンモール広島府中へ近づくにつれ、その満足度は高まります。

三次市は満足度が低いですが、農村部へ行くにつれ、その傾向は強まります。

このように地域格差がありますが、その他の満足度には差がない、ということに注目していきます。地域満足度が高い府中町でも生活満足度はさほど高くない、という解釈もできます。

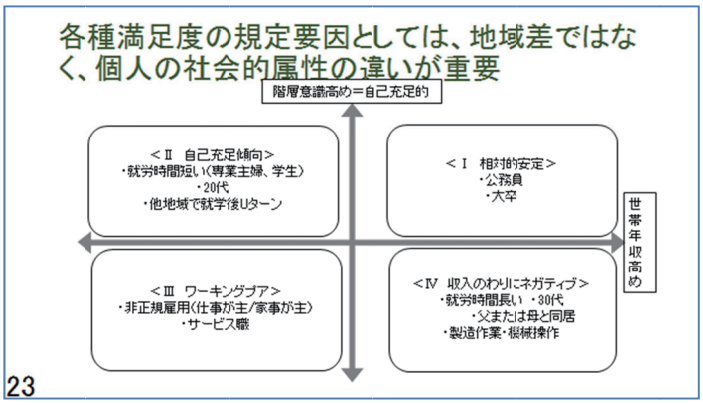
仕事満足度では、三次市の方が高いのですが、詳しく見ていくと男性には差がないことが分かりました。三次市の女性の満足度が高いようです。後程説明いたします。



（スライド22）

地域満足度に差がある理由は、消費環境と、交通アクセス環境に格差があるからです。

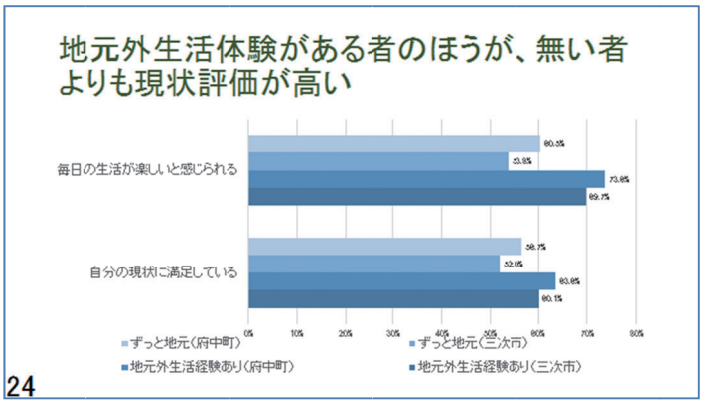
「地域に若者や子育て世代が暮らしやすい環境がある」については府中町が78.2%で三次市が32.5%と差があります。これは子育て支援や政策の問題には全く関係がなく、単にイオンモール広島府中までの距離で決まっています。この消費環境の格差が地域満足度を規定しています。



（スライド23）

地域満足度に差があっても、生活満足度や幸福度には差がないのはなぜでしょうか。それは個人の仕事や社会的属性の違いが重要だからです。

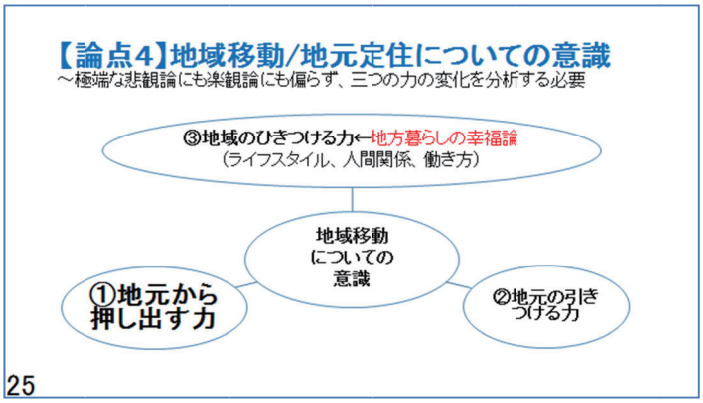
世帯収入が高ければ満足度は高いのですが、ポイントとして、就労時間の長さが関係します。ある程度収入が高くても、60時間以上働いている長時間労働のサラリーマンは、自己評価が低くなることがはっきりしている。専業主婦の収入は高くないことが多いですが、満足度は高いです。職業で見ると、サービス職は収入が低いこともあって満足度も低い。製造作業等の工員さんは収入が高めでも満足度は低い。地域差よりも社会的属性の違いが生活満足度には影響するようです。



（スライド24）

今回のアンケート調査で気付いた点の1つに居住歴が各種の満足度を強く規定している点です。「毎日の生活が楽しいと感じられる」「自分の現状に満足している」という項目に対して、「ずっと地元」の人たちの満足度は低く、「地元外生活経験あり」の人たちの満足度は高いです。

これは、よく言われる地元で楽しく暮らせれば幸せという「マイルドヤンキー論」とは異なる傾向です。地域に居続けることが幸せというよりは、地域を超えた広い社会と繋がっている人の方が満足度が高い、という傾向が明らかになっています。



（スライド25）

中央への人口移動が強まっているのか、地元志向が強まっているのかについての答えは簡単には出ません。地域移動についての意識については、三つの要因に分解して、それぞれについて考える必要があります。具体的には、①地元から押し出す力、②地元のひきつける力の二点がまず挙げられます。そして、最近注目されているのは、それられとは異なり、③地方暮らしにひきつけられる若者が増えているという状況です。実際はどうなのでしょうか。

①地元から押し出す力（地元からの斥力）

経済的要素：　高等教育の進学機会、就業機会
⇒府中町と三次市とのあいだに明瞭な格差
～府中町は過半数が広島都市圏以外で暮らしたことがない。
～三次市は高卒時に大半が実家を離れる。⇒当然、大卒比率は低い。
～両地域とも県外大学進学率は高いが、減少傾向（特に広島、岡山）。

存在論的要素：「外の世界に視野を広げてみたい」「一人暮らしをしたい」
～大都市への憧れは減退。府中町は「地域外に出る機会がなくても退屈しない」と考える者が多い。ただし、「海外」など地域外での生活体験には興味があり、その点では「内向き」とは言えない。

26

（スライド26）

まず、「①地元から押し出す力」について考えてみます。三次市は高等教育の進学機会が無いので、進学＝地域移動ということが挙げられます。ところが、近年、両地域とも県外の大学へ行くのではなく、広島県内の大学へ進学して、働こうという比率が上がっています。大都市へ人が移動し、地方消滅論が言われていますが、この趨勢を踏まえれば、人口減少はそれほど悲惨なことにはならないのではないでしょうか。

「外の世界に視野を広げてみたい」「一人暮らしをしたい」という若者も依然として多いですが、昔は都会に向かっていましたが、今は必ずしも都会ではなく、親元ではない近くの場所を選ぶ傾向にあります。

②地元のひきつける力（地元の求心力）

「地元」の機能～将来見通しが不安定化する社会のバッファとしての役割。
経済的要素：実家資源の活用
～地元外に出ていても、キャリアに行きづまったさいに、「地元Uターン」「家業継承」が脱出口とみなされうる。

存在論的要素：地元の友人関係の居心地の良さ
～ウェブ上のコミュニティによる維持・促進⇒Uターンにつながる事例も

三次市のUターン比率の高さ・・・
①やむをえずの地元外進学・就職⇒潜在的地元志向⇒「とりあえずUターン」
②「家・墓・田圃」の継承や、親のケアについての責任意識

27

（スライド27）

「②地元のひきつける力」の一つには経済的メリットがあります。右肩上がりの時代でなく、先行きが不透明なので実家の資源に頼る、というものです。また、どこにいてもfacebookやLineで場所を問わず繋がることができるようになったことも地元の求心力を高める一つの要因です。

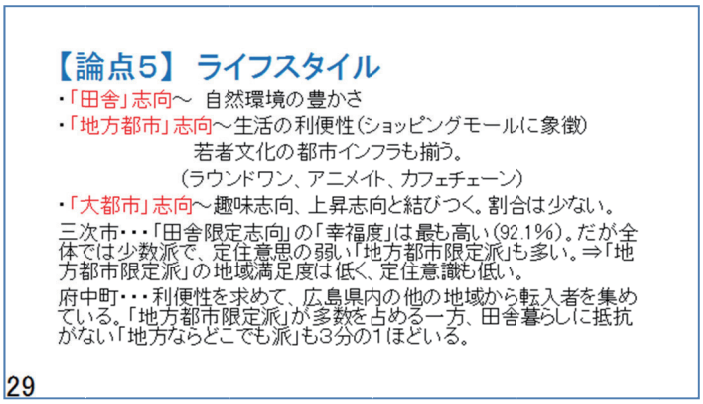
③地域のひきつける力（地域の求心力）

・若者にとっての「地方暮らし」のイメージがポジティブに転換
（地方暮らしの幸福論の時代⇒脱大都市志向/地方移住の動き）
①物質的な上昇志向の減退/困難 ⇒ 価値観の転換？
②地方の消費社会化またはウェブ社会化が満足度を高める
↓
地方における「地域のひきつける力」が重要に。
①ライフスタイルの魅力（田舎志向、地方都市志向）
②働き方の魅力（安定志向、新しい働き方志向）
③社会関係の魅力（地元つながり志向、地域つながり志向）
⇒だが、その理想と現実との間にはギャップがある。

28

（スライド28）

「③地域のひきつける力」というのは、「地方暮らし」のイメージがポジティブになってきている、ということだと考えます。ところが、調べていくと、理想と現実の間には差があるので、ここからはそのギャップを3点に絞って考えていきたいと思います。

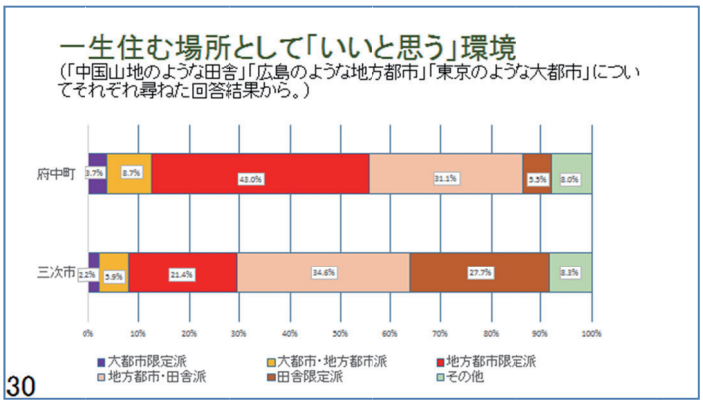


(スライド29)

ライフスタイルを考えるために、質問紙調査では「自分が一生暮らす場所としてはどこが良いですか。」という項目を設定しました。回答は3つの選択肢から選んでもらい、それぞれのパターンを確認していきます。選択肢には、「中国山地のような田舎」、「広島のような地方都市」、「東京のような大都市」があります。

「地方都市」にはショッピングモールに象徴される生活の利便性がありますが、1つ補足を付け加えます。若者が文化や娯楽を楽しもうとした時の最低限のインフラが今時の地方中枢拠点都市圏には揃っているということです。代表的な娯楽施設としてラウンドワンやアニメイト、また有名なカフェチェーンは、広島市・福山市・岡山市・倉敷市にはあります。一方、三次市や庄原市にはない、という点ははっきりしており、若者にとってその意味は大きいです。

地方暮らしの若者への調査の結果、若者は「地方都市」志向が一番強く、「大都市」を目指す若者は1割にも満たず、数は非常に少なくなっているのが現実です。趣味に非常にこだわりがある、キャリアを目指したいという上昇志向の持ち主が「大都市」志向になります。

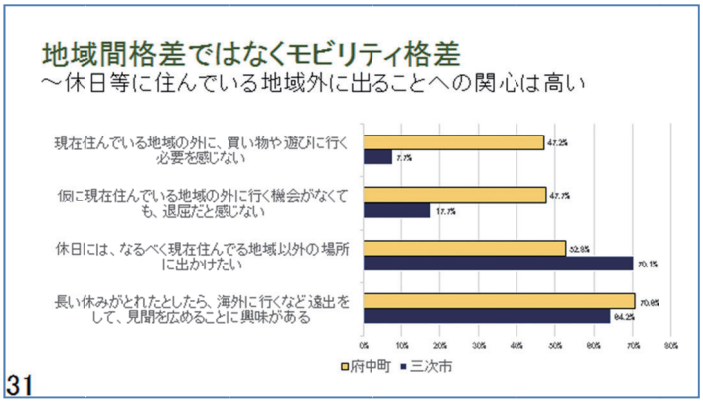


(スライド30)

現在府中町に住む人の43%が、住む環境を地方都市に限定しています。大都市に住みたい人は3.7%とほとんどいません。田舎から出てきた人も多いので地方都市・田舎派も31.1%います。

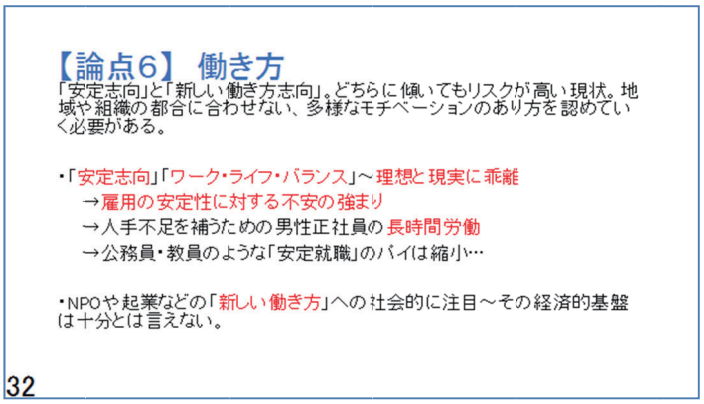
三次市は田舎ですので田舎限定派が多いかと思いきや、27.7%と過半数を占めるほどの数でもないです。幸福度が一番高いのはこの田舎限定の人たちで

す。田舎に住み、親元で正しいものを食べ、正しい生き方をする、と力強く言う若者もいました。三次市で多いのは地方都市・田舎派で、同じ地域に住んでいてもライフスタイル観は混在しています。



（スライド31）

生活等の現状評価に影響を与えるのは、地域間格差ではなく、モビリティ格差です。三次市では「現在住んでいる地域の外に、買い物や遊びに行く必要を感じない」と1割未満の人しか思っていません。9割以上の人が外で買い物をする、休日ごとに車で外へ買い物に行く、という若者が多数を占めています。府中町では、半数の若者が外に出なくてもいいと考えています。しかし、車があれば1時間半でどこへでも行けると考える三次市の若者の多くは、必ずしも自分の生活にネガティブであるわけではありません。



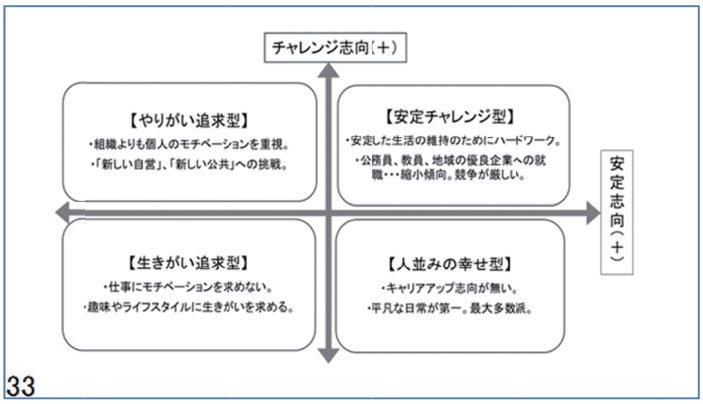
（スライド32）

より大きな地方の問題として、働き方の問題があると思います。私はこれが核心だと考えています。

地方で働くことは東京などの大都市と違ってどんな魅力があるのか。大きく2つのイメージに分かれています。従来から、地方は収入は高くなくてもそこそこ安定した暮らしができる、という「安定志向」の魅力があると言われてきました。ところが、安定している企業、業績が伸び続けている企業、を探して就職することが近年難しくなってきています。安定するために資格を取ったり、無理な努力をしたりする「安定チャレンジ型」の若者もいます。

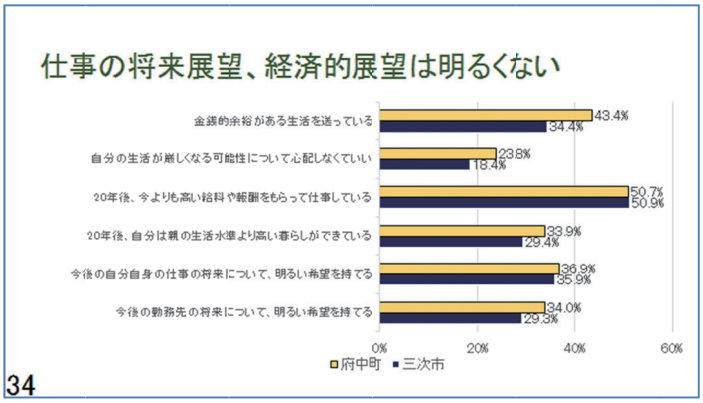
一方、安定のために他のことを犠牲にしたくない、と早い段階で見切る若者もいます。一般企業で働くのもつまらないので、NPOや起業に目を向ける若者も出てきています。最近「新しい働き方」がもう一つのイメージとして、脚光を浴びています。でも、聞き取り調査をしていると経済的な問題が大きく、年収が100万円台～、昇給の見通しが立たない等々、基盤が十分とは言えません。

「安定志向」と「新しい働き方志向」のどちらに傾いてもリスクが高いのが問題です。



(スライド33)

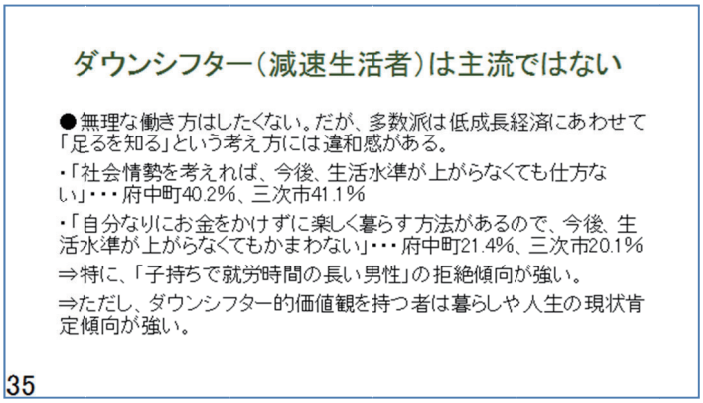
図示したものの右上が先ほども出ました【安定チャレンジ型】です。「安定」を獲得するためにチャレンジし続ける状況です。



(スライド34)

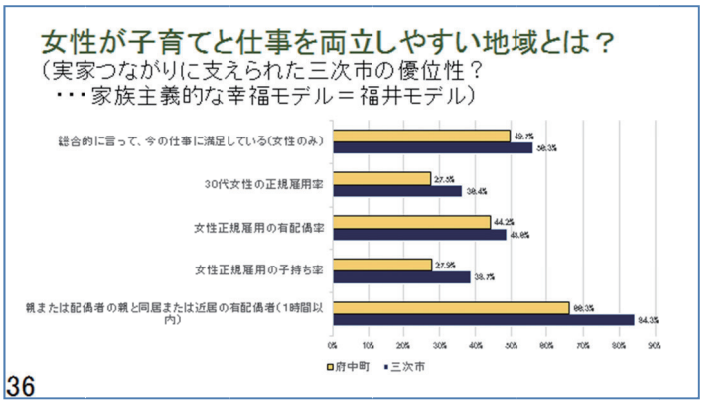
仕事の将来展望、経済的展望については、両自治体ともネガティブな結果が出ています。「今後の自分自身の仕事の将来について、明るい希望を持てる」と回答した人は、全体の1/3程度ぐらいの割合に留まっています。「今後の勤務先の将来について、明るい希望を持てる」人も3割程度に留まっています。

悲観的な展望だからと言って、働くモチベーションがないわけでもなく、自分の目標をそれぞれ持って頑張って生活をしています。



(スライド35)

地方には、東京のように競争が激しくない、というようなライフスタイルのイメージがあります。無理な働き方はしたくない、減速生活と呼ばれるダウンシフターが主流に思われがちですが、地方の現状はそうでもないです。労働時間を見ると東京とさほど変わらず、長時間労働の割合も多い。「社会情勢を考えれば、今後、生活水準が上がらなくても仕方ない」と考える人は40%程度で多くもないです。「自分なりにお金をかけずに楽しく暮らす方法があるので、今後、生活水準が上がらなくてもかまわない」という項目には2割程度しか賛同していません。



（スライド36）

三次市では「女性が子育てと仕事を両立しやすい」項目について満足度の高い数値が出ています。要因を探ってみると、自分の親が近くにいる＝親に手伝ってもらえる、という環境があります。この現象は都道府県で言うと、「福井モデル」と言われます。親の援助があって共働きができる。中心部では専業主婦率は高く、田舎では共働き率が高くなります。この福井モデルは地方の「いなか」に一般的な特徴であるとも言えます。

三次市や福井モデルのような現象を素晴らしいと言えるのかどうか。実家に頼ることのできる人は良いかもしれないが、そうではない人はどうでしょうか。熊本県から三次市に来た女性にインタビューをしました。子育てを手伝ってくれる人はいない彼女は、「三次市は子育て環境がいいとは全く思わない。頼る人がいなくて困ることがある。」と言っていました。地元かどうかで格差が出ている、ということが一つの論点になると思います。

【論点7】社会関係
～「つながり」の多様なニーズ

●人間関係総体の満足度　府中町≒三次市
　地域内の友人関係の満足度　　府中町＞三次市
「地域活動・社会活動」の積極参加　　府中町＜三次市

●「地元つながり」を求める「地元層」、「地域つながり」を求める「転入層」、ハブとなる「Uターン層」（府中町＜三次市）の異なる人間関係のニーズ。

●社会活動・地域活動への参加　≠　社会問題への関心
～「個人の幸福」追求を、社会の多様性、他者への想像力につなげていくための多様な道筋。

37

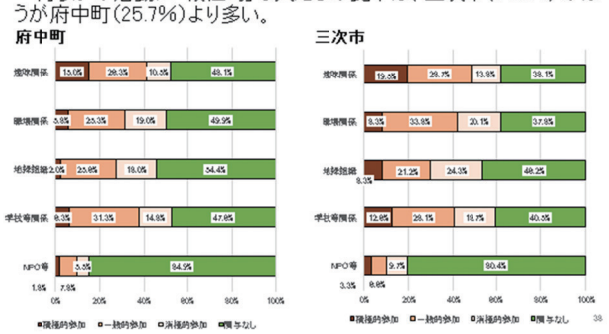
（スライド37）

最後のポイントは、社会関係＝「つながり」を作ることが、生活満足度を高める手がかりになるのかという点です。「つながり」の人間関係総体でみると、府中町と三次市にはほとんど差がありません。ただし、「地域内の友人関係の満足度」は三次市の方が低く、三次市には人がいない、出会いが少ないと言う人がいました。ただ、広島や県外につながりを持っている人も多く、人間関係総体としての満足度は埋め合わされているようです。埋め合わせのもう一つの要因は「地域活動・社会活動」の積極参加です。

つながりは大きく二つのタイプに分けることができます。一つは、同級生、同世代、近所からなる「地元つながり」です。

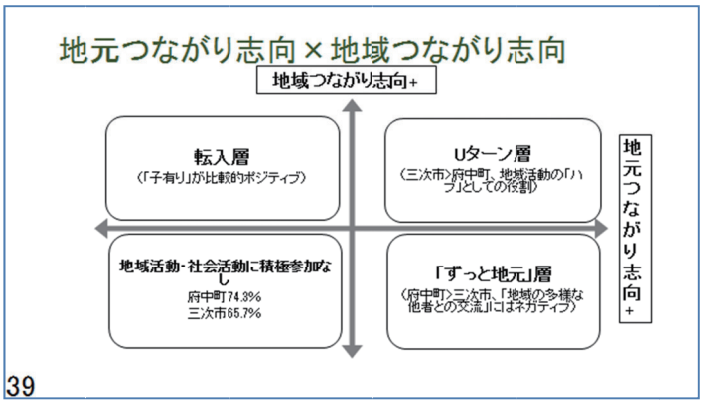
一方、転入してきた人たちは、新たに地域の中でつながりを求めます。最も積極的なのは子どもを持つ人たちです。子どもを持つと同時に地域と関わりをもとうとする人が多く、「地域つながり」と呼びます。

地域活動・社会活動への参加度
～何らかの活動に「積極的」な人たちの比率は、三次市(34.3%)のほうが府中町(25.7%)より多い。



（スライド38）

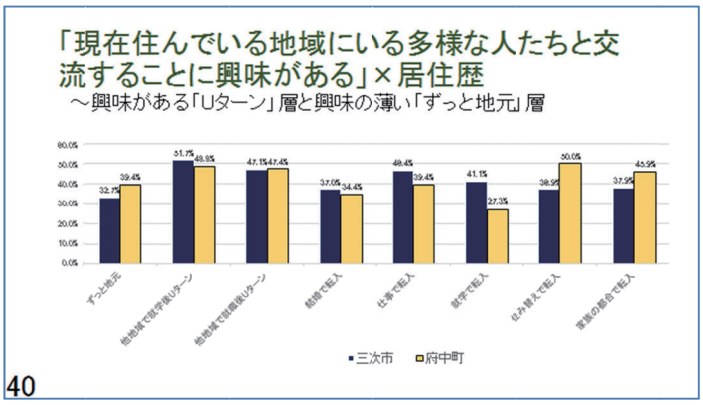
地域活動・社会活動への参加度は、三次市が府中町より高いです。何らかの活動に「積極的」な人たちの比率は、三次市が34.3％で府中町は25.7%です。



（スライド39）

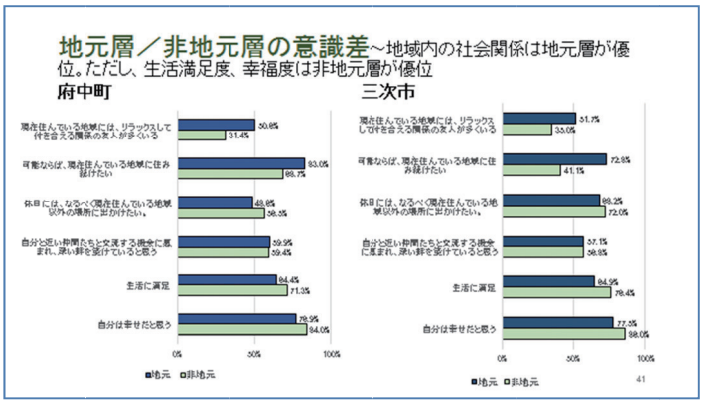
つながりのパターンについて、少し整理をして図に示します。こちらのグラフの上側「地域つながり」と右側「地元つながり」の両方を求めているのはどのような人たちでしょうか。調査をしてみると、「Uターン層」に多いようです。一度外に出て戻って来ていているので、「地元層」と「転入層」の両方とつながる場合が多いようです。地域活動の中心となることも多いです。三次市の場合は地域活動の核となるのがこの「Uターン層」です。一方、府中町は「Uターン層」が薄く、「ずっと地元」層と、子育て世代に多い転入層がそれぞれに活動していて、両者はあまりつながらないようです。

そして、実は、地域活動や社会活動には関わりを持たない人が地方の若者の多数派であるというイメージを持つことは重要です。「地域活動・社会活動に積極的に参加なし」は、府中町74.3%、三次市65.7%となり、このサイレントマジョリティーに注目する必要があります。



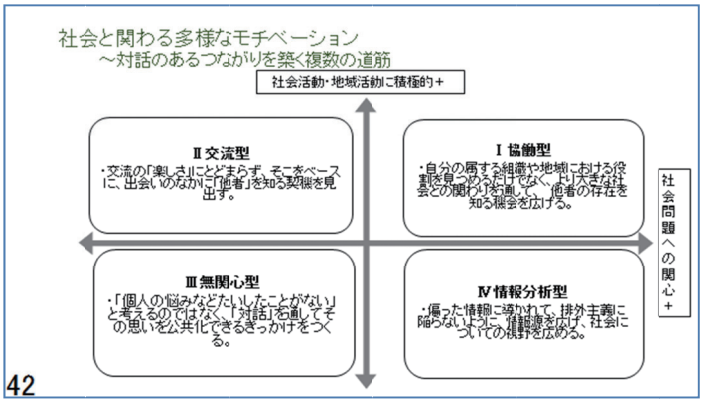
（スライド40）

現在住んでいる地域にいる多様な人たちと交流することに興味があるのは、「Uターン層」です。



（スライド41）

「地元層」は地域内の社会関係には満足しているが、生活満足度と幸福度については、非地元層が優位です。



（スライド42）

社会とつながりを求めるのは良いこと、という言い方がありますが、つながりに何を求めているのでしょうか。グラフの上半分、社会活動・地域活動に積極的な人たちでその数は3割程度です。下半分の人たちは積極的ではないのですが、自分で本を読んだり、情報を収集したりして、社会問題への関心がある「Ⅳ情報分析型」の人たちもいます。四つのタイプに分け、本ではそれぞれに詳しく論じています。第2部のパネルディスカッションにも繋がるのでそのアプローチについてそれぞれ話をしておきます。

Ⅰ協働型　地方によくあるパターンで社会活動に積極的です。自分に関係する社会問題には関心が高いけれど、例えば国の政治の動きにはあまり興味がないです。国は一人で動かせる問題ではないので仕方がない、気持ちが重くなるだけなのでニュースは見ない見たくない、と自分のできることをしようとするタイプです。一つの考え方であるとは思いますが、自分の属する地域や組織以外で、似たような他の地域の人たちと考えていくことができたら、もっと良いと思います。自分たちのやっていることの意味が外の視点から検証でき、広い社会に目を向けることができるからです。

Ⅱ交流型　イベント等に出ることが多

いタイプですが、その目的がイベント自体であったり、イベントには関係なく参加者との出会いであったり、と動機は様々です。一過性の出会いを求めるだけではなく、他者がどう考え、生きているのかを深める関係になるかどうかが鍵になると思います。

Ⅲ無関心型　無関心と聞くと悪いことのように聞こえますが、無関心には理由があります。自分の経済・生活がどうよくなるのか政治や経済との関連がよく分からない。だから考えても仕方がないと言う人も多くいます。「社会的なことは苦手です」と言う人は多いですが、話を聞いていると、それぞれに社会についての思いを持っています。例えば子育てについて意見は持っていても、自分の困りごとはたいしたことがない、みんな悩みはあるし、社会の問題ではなく、個人で処理する類のものと思っているから、語らないのです。そこに大事な問題が潜んでいるかもしれません。近しい関係からでも良いので、社会についてのお互いの思いを打ち明けられる場を作っていく必要があります。

Ⅳ情報分析型　社会に興味はあるのでスマホで毎日情報を取り入れています、と言うのですが、その情報に偏りがあることがあります。アメリカの話にはなりますが、今回トランプ氏を支持したのは製造業衰退地域の地方暮らしの若者が多く、その排外主義的な部分が問題となりました。視野を広めていくことがテーマになります。

結論と提言

1、「地域満足度」の格差は暮らしや人生の評価とは関係無い。一般的に「幸せな地域」などというものは存在しない。社会的属性の違いに留意し、若者個々人の選択肢を広げるアプローチが大事。

2、地域に目を向けつつも、他地域にも生活圏や人間関係が広がっている者のほうが現状評価は高い。コミュニティや組織の都合で若者に「地域」の枠を与えてしまうのではなく、個々の若者の生活圏・雇用圏の広がりをベースに考え、オープンで豊かな社会関係を築いていけるような環境づくりをすることが大事。

3、「個人の幸福」と「社会の幸福」のジレンマを乗り越えるために、地域の若者の多様性についての想像力を高め、複数の道筋によって「対話のあるつながり」を築いていくことが大事。

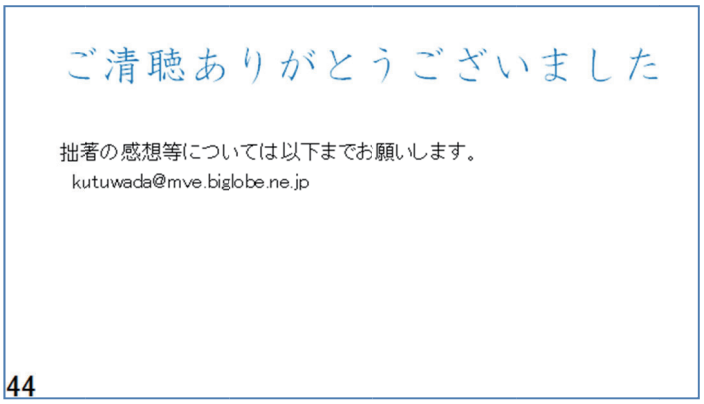
43

（スライド43）

結論の1つ目として、個人の暮らしや人生の満足度に対して地域の満足度は関係のないことで、『幸せな地域」などというものは存在しない、ということです。おそらく行政としてはまちづくりとして「地域満足度」をどう上げていくかが焦点だと思いますが、どこの土地でも幸せと不幸はあります。むしろ個人の現状評価に注目し、社会的属性の違いに留意して、個々人の選択肢を少しでも広げていくアプローチが大切ではないでしょうか。

2つ目は、地域に目を向けながらも、他地域にも人間関係の広がりを持つ人の方が現状評価は高いようです。個人の生活圏・雇用は行政区分を超えてかなり広がっているので、そのような環境をベースにオープンで豊かな関係作りが大切です。

最後に、地域の多様な若者に対して、想像力を高めていくことが重要です。「個人の幸福」と自分以外の人々を含む「社会の幸福」がつながりにくい状況ですが、乗り越えていく必要があります。生活保護が、在日韓国人が、外国人が、と他者を一括りにしたイメージで語るのではなく、実際にその立場にある人の声に耳を傾けることが大事です。そのやり方には複数の道筋があり、それらによって「対話のあるつながり」を築いていくことが大切です。



（スライド44）

ご清聴ありがとうございました。

第 2 部　パネルディスカッション

第 1 部終了後、約 10 分の休憩を経て、第 2 部を開始した。

第 2 部では、第 1 部での論点を踏まえつつ、著者と、若者を研究対象とする「団塊ジュニア世代」の社会学者 3 人が地方暮らしの若者について意見交換を行った。

司会（佛圓）

それでは、第 2 部のパネルディスカッションを開始いたします。議論していただく先生方を紹介いたします。左側からコーディネーターを務めていただきます甲南大学准教授の阿部真大先生、第 1 部に続き、コメンテーターとして轡田先生、パネラーとして参加していただく兵庫教育大学助教の永田夏来先生、福島大学准教授の川端浩平先生をお迎えしております。

阿部先生、よろしくお願いいたします。

（拍手）

1. 自己紹介と問題意識

（コーディネーター）阿部　真大

阿部

第 2 部のパネルディスカッションの進行案内役の阿部と申します。我々パネラーは団塊ジュニア世代の社会学者であり、東京圏ではない地方都市出身です。この時間は、共通の話題に関心を持つ 4 人が集まり、地方問題についてディスカッションいたします。轡田さんの『地方暮らしの幸福と若者』、そこから派生する政策的課題についてみなさんと考えていければと思います。

私の自己紹介をいたしますと、轡田さんとは大学院の先輩後輩の間柄です。私が修士として上野千鶴子先生のゼミに入った時に、轡田さんが博士課程に在籍されていました。その頃は中国の研究をされていて、その後吉備国際大学へ行かれ、連絡が途切れました。私自身が神戸に移った頃、轡田さんが面白い論文を書いているという話を別の先輩から聞き、読みました。中国の研究では

なく、中国地方の研究に変わっていて（笑）、地方の若者についての論文でした。会いに行って話を聞いたら、東京での生活から一変、吉備国際大学に勤め、地方暮らしの若者たちに出会い、現実に打ちのめされたそうです。立ち上がれないくらいの現実があったのですが、頑張って立ち上がり論文を書いた、とのことでした。私はすごいことだな、と思いました。ショッキングな出来事に遭遇し、その衝動に突き動かされて、この本が生まれたわけです。社会学者の鏡ですね。

社会学者自体は東京や大阪に多いので、東京から見た地方や、地方の若者に偏りがちでしたので、今回実際に調査して分かったものは多いと思います。永田先生から家族論、川端先生から国際社会学、それぞれの視点からの感想をいただきたいと思います。まずは、永田先生からお願いいたします。

（パネリスト）永田　夏来

永田

皆さんこんにちは。兵庫教育大学から参りました永田と申します。本日はよろしくお願いいたします。

兵庫県立大学と間違われることが多いのですが、実際私も、兵庫教育大学のことは知りませんでした。勤務する前に、どんな場所かな、と思ってグーグルマップで調べました。何もないところが地図上に指し示されていて、拡大すると確かに大学はあれど、周りは田んぼでした。大阪府の豊中市という場所に住みながら、毎日1時間かけて兵庫教育大学へ通っています。まさに轡田さんと同じような状況です。小学校などが夏休みに林間学校などでキャンプをする兵庫県立嬉野台生涯教育センターという公共施設があって、あとは田んぼです。それでも轡田さん分類によると、田舎ではないということです。そうですよね？

轡田

はい、ギリギリ（田舎ではない）です。拙著では、地方の「田舎」つまり「条件不利地域圏」を、都市度の低さだけではなく、拠点都市への通勤・通学比率が 10％未満のアクセスの悪い地域として定義しています。

永田

兵庫教育大学の環境より田舎もあるんだなぁ、と驚きますが、それこそモビリティの違いなんでしょうね。電車に 1 時間も乗れば、大阪府や、阿部先生の超絶都会の神戸市に行ける、というのが関係するのだと思います。私自身も轡田さんと同じで、地方の長崎から東京

の大学へ行きました。そこで博士を取得して、就職で地方へ行ったわけで、就職してその土地環境に愕然としました。自分が直面している現実と東京で勉強したことの違いと共通点をどのように整理したら良いのか、と悩んでいました。そこで轡田さんのこの本がすごく良いな、と響きました。広島で調査対象となって人にとってはすごくリアリティがあるかもしれないけど、でも広島の話だよね、と思ってしまうかもしれない。ですが、地方に共通する要素が実にたくさんあると思います。この本から日本全体を考えていくことができそうですので、それぞれの先生方と話を組み立てていければと、今日こちらに参りました。

広島の調査から、日本全体を考えていくことができる

自己紹介はこのくらいにして、結婚研究を専門としている私から何が言えるか、について移ります。できちゃった結婚は妊娠先行型結婚と呼び、調査としてはインタビューや統計があります。家族に関する社会的関心が高いトピックとしては、未婚化や晩婚化、待機児童解消などの子育て支援の話などがあります。どれもかなり東京からの視点で、地方はもう少し複雑だと思います。生活圏の話も関係するのではないでしょうか。できちゃった婚のインタビュー調査では、例えば、専門学校卒業後、市外に出ていたけど、地元に戻ってきて、親が経営している会社を手伝っています、という人の話を聞いたことがあります。「妊娠したので結婚します、何とかなるかと思って」という地方の人は、東京で言われている未婚化とか晩婚化とは全く違う背景を持っています。この要因は何かと考えた時に、周りとのネットワークだとか親の援助という生活圏の話を丁寧に分析する必要があります。2点目の婚活については、先ほども言いました地方での実際の生活、リアリティが無視されがちだという点です。東京起点の考え方で話を推し進め、今や危うい状況になっているのではないでしょうか。婚活というのは東京の考え方で、その理由は大企業で産休や育休を取りながら雇用が続けばいいね、という発想が基本にありそうです。そのためにより良い条件の相手を探す、もう1つは、じっとしていたら結婚できないので結婚すること自体が目的になっている、というところが論点かと思います。実際、地方での生活リズムや人間関係を前提として、無理して結婚してもメリットはあるのでしょうか。家族形成や子育ての枠は、昭和的な影響が大きいです。戦後以降の家族の仕組みやスタイルの延長となっています。轡田さんの本が分析している地方の生活は、それらと違う切り口になっています。新たな視点を加えることで東京を中心とした中央的な価値観や社会の在り方をも見直していけるのではないでしょうか。これまで少し変だね、と言うことはできても何がどう変なのか、とはっきり指摘することが難しかったことが、轡田さんの本により地方の結婚や家族形成を異なる視点

「婚活」というのは東京の考え方

で分析することができそうです。残り2点はのちほどお話します。

阿部

家族形成、生活圏という言葉が出てきました。家族のことだけを切り取り、その生活圏を考慮しない調査をしても、分からないことがきっとあると思います。東京で生まれた婚活という現象を地方にそのまま当てはめて、婚活しましょう、という流れに今はなっています。それぞれの地域に結婚や家族形成のリアルがあって、それらは地域ごとのヒューマンリソースと結びついています。轡田さんの本はそのような生活圏に注目した、というのが、家族社会学の永田さんが感じた一つの可能性ということでしょうか。

続いて川端さんよろしくお願いします。

川端

こんにちは。新幹線で 6 時間かけて参りました福島大学の川端です。今は福島大学に勤めていますが、岡山県の出身です。久しぶりに西日本に戻って来て、広島弁を聞くだけで故郷に近い所に帰ってきたな、と感じます。市電に乗っていても、人の顔を見ているだけで、自分と関係ある人なんじゃないか、などと思ってしまいました。

(パネリスト)川端 浩平

地方にいる人たちにとっては世界を広げることが重要という視点

轡田さんの本で参考になったのは、地方にいる人たちにとっては世界を広げることが重要だ、という視点です。普通の生活をしていると感じにくいことですが、身の周りで起きている現実を理解するには、広い世界と結びつけることが必要だと思います。構造的に繋がっている世界と関連付けて考えない限り、地方をとりまく様々な問題に対する答えには近付けないのではないでしょうか。世界を広げるという視点がこの本にある非常に大切なポイントです。

轡田さんが専門を中国から中国地方へ変えたというのは、社会学的には興味深いです。場所に結びついた研究として、農村社会学、都市社会学、1970 年代頃から地域社会学、がある中で、轡田さんの著書は地域社会学に近いものだと思います。轡田さんがもう 1 つの「中国」研究をされていた頃は、国際社会学という、今で言うグローバリゼーション的な枠組みの研究に取り組まれていました。その流れもあり、この本は、国際化というマクロな問題と地方の問題を関連づけていると思います。地域の問題でも焦点が当たっている部分として、多様化をめぐる問題があるのではないでしょうか。戦後の高度経済成長を経て、ポスト工業化へと産業構造が転換した頃、製造業のあり方と雇用、地域の若い人たちとの関係性が大きく変わり、グローバル化し、流動化しました。ですが、地方の多様

な若者の一つ一つの事例を研究するのは方法として難しいのが現状です。我々が聞き取り調査をすると、自身の事をよく把握して話してくれる人、キャラの立っている人など、はインタビュー映えして論文にも書きやすい。ところが実際にはそのような人は例外的でほとんどいません。圧倒的に多いのは、話さない、編集でカットされてしまうような人たちです。ですが、そちらが地方の若者をとりまくリアリティを示しているように思うのです。私たちの知りたいリアリティに触れるためには、根気よくそれぞれを質的かつ量的に調査していく必要があります。轡田さんのこちらの本は論文の執筆や編集過程で消えてしまうような等身大の個々の若者たちの事例を試行錯誤しながらも見事に描き出した読み物だと思います。

サイレントマジョリティへの注目

ここからは、轡田さんの本のタイトルに一見結びつかない話になりますが、私はこの本を読みとくキーワードの一つとして、サイレントマジョリティの多様性という問題があると思います。サイレントマジョリティ、という人は実際いないのですが、そのような捉え方があります。分かりやすい例ですと、トランプ現象があるかと思います。政治と結びつく場面、ポピュリズムという言い方がされます。黙ってはいるが人々はこのように感じている、サイレントなマジョリティの声です、とテレビで報道されたり、過激なパフォーマンスと結びついたりします。昨年辺りからグローバルにこのような現象が頻繁に起きている状況です。もう一方で、それが排外主義と結びつく現状もあります。広島でもありますが、ヘイトスピーチが問題になっています。私自身、岡山県で研究していた頃から在日コリアンの聞き取り調査を行っていて、ヘイトスピーチが深刻な問題だと考えています。これまではサイレントなマジョリティでしたが、最近ではラウドリーなマジョリティになっているようです。

轡田さんが先ほど何度か口にされていたマイルドヤンキーという言葉にも注目したいです。『ヤンキー経済』という本に登場して、地方の若者、都市圏郊外の若者イメージとしてメディアにも頻繁に登場する言葉です。現代社会の一側面を表すとても象徴的な存在で、マーケティングの観点から出てきた言葉です。マイルドヤンキー論とは、地方にはマイルドヤンキー層と考えられる人たちがいて、注目すべき消費者である、という話です。この層を消費させるためにどのような工夫ができるのかを考えていく、という流れです。マイルドヤンキーのイメージは、地元が好き、行動範囲が半径 5 km 以内、EXILE を聞いていて、車は「いつかはクラウン」ではなく、「いつかはアルファード」といった新しい嗜好性を備えているとされる消費者像です。とても分かりやすいイメージとして想像されると思います。『ヤンキー経済』の本もそうですが、地元志向的なものは、とも

すれば保守的なイメージであったり、現状から変わろうとしない否定的なイメージに結び付けられます。ただし、マイルドヤンキー層が優良消費者だと捉えられる意味は、行動範囲が 5 km以内かもしれないが、保守的ではなく色々な欲望がある、あるいは、旧知の知り合いのみと地元でつるむイメージがあれど、本当は外の世界に出て知らない人にも出会いたい、という欲望もまた強いのではないかと思います。はっきりと調査したわけではないが、私自身、最近になって facebook 等で地元から同窓会をしたという情報が入るようになりました。地元つながりには均質のイメージがありますが、小学校中学校の同級生は均質ではなく様々です。大都市でない限り、中学校までは選抜機能が存在しません。非選抜型の人間関係なので色々な人がいます。高校以降の選抜された後の人間関係の方が、同じような人たちになりがちです。そのように同じような人たちばかりでは人間関係の豊かさは欠落してしまいますし、中学校までのように多様な人たちが存在することはすごく重要です。

地元つながりの人間関係の多様性への着目

阿部

川端さんから見た轡田さんの本の意義は、東京のマーケッターや社会学者が見る一枚岩的な若者ではなく、もう少し複雑である、ということを丹念に読み解いたもの、ということでした。轡田さんから何かコメントはありますか。

轡田

多様だ、というのは地方に住んでいる人にとっては当たり前のことですが、マーケティングの世界ではひとくくりにされてしまいます。本の中の具体的なデータで話をすると、自分の趣味にヤンキー的要素はあると思いますか？オタク的要素はあると思いますか？というアンケート項目があります。オタクに関しては、未婚で子無しの男性の 2/3 が「はい」と答えています。オタクはマイノリティではなく、今やマジョリティで恥ずかしいものではないようです。ヤンキーに関しては、建設作業をされている人に限れば 43%が「はい」と答えています。女性ではほとんどいませんでした。インタビュー対象者に限定すると、2 名が「はい」と答えています。その理由としては、車のマフラーを改造したり、車高を低くしたりするが、昔の暴走族のようにそれらを誇示するのではなく、自己満足の世界でやっているのだという点を強調しています。

（パネリスト）轡田　竜蔵

マーケティングと社会学のアプローチの違い

ところが、全体傾向を見ると、地方の若者とヤンキーを結び付けたい主流の見方とは異なり、自称ヤンキーは男性の 10%に過ぎません。つまり、ヤンキーという言葉は、自称としてよりも他者を揶揄

する言葉として機能していて、そのなかにもいろいろなタイプの人がいます。私としては、適当なラベリングをして終わるのではなく、一人一人が何を考えているのかをしっかり聞き取っていくべきだという立場で分析をしています。

川端

自動車やバイクのマフラーを改造するのは、どちらかと言うと昔のタイプで、マイルドヤンキーと言うよりスパイシーな感じがしますね。クラシックなタイプと言えましょうか。マイルドという呼び方の背景にあるのは、「普通」からは逸脱した不良に象徴されるような存在が、昔に比べて社会から見えにくくなったことを象徴しているのではないでしょうか。実際には轡田さんが言われるようにそれぞれに違いがありますが、第三者からは身近な世界で生きている人々との差異を認知しづらくなっている状況があります。現代社会がもたらした問題の一つだと思います。

例えば私自身がホームレスの調査をしていました。厚生労働省はホームレスを見た目で数えます。実際には、特に若いホームレスになればなるほど見た目で判断できません。見た目は普通の人と同じなのです。

阿部

広島と聞くと、私『BAD BOYS』というマンガを想像してしまい、暴走族のイメージが強いのですが、ポスト工業化の流れのなかで、工場労働者よりもサービス業の従事者が増えていって、分かりやすい階級の象徴が見えづらくなっていきました。今はみんな同じ格好をしているがゆえに、以前のように、この格好はワーキングプア層だろうという、分かりやすいものがなくなっていきました。

さて、今度は私からまとめも兼ねつつ、次の大きな論点につなげていきたいと思います。轡田さんの本の一つの大きな功績として、まずは、いわゆる中央と地方との間の格差ではなく、地方の中での格差に注目したことが挙げられます。地方に住んでいると当たり前のことに思えますが、東京にいると全て同じに語られがちです。昨日事前に打ち合わせをしたのですが、その時に笑い話として紹介したことがあります。私は岐阜県岐阜市の出身ですが、岐阜市の隣の市から来た人が、私を「シティ・ボーイ」と呼びました。笑い話なのですがリアルな話でもあって、例えば広島市に住んでいる人は広島の他の地域から見ると、都会的に見えると思います。東京から見ると一枚岩ですが、実際の広島県民にとっては、地域の格差がとても大きいものです。マイルドヤンキー論も同じように一

地方の中での格差という視点

枚岩で語られがちですが、違いがあるということですね。

この本の二つ目の意義は、個人を分析の焦点としたことではないでしょうか。例えば昔は、自民党の議員がある特定の地域に配慮して、その地域がぐんと豊かになる、という分かりやすいものがあったと思います。今はそうではなくて、個人をベースにしながらどのように地域を考えていくのかということが重要になってきています。地域にいる個人の状況は、会社に勤められない、非正規雇用、シングルファーザー、引きこもり、と様々です。また、モビリティが高まり、個人が一つの地域にとどまらなくもなってきている。女性に関しても、子どもが生まれたら昔のようにみんながおばあちゃんの手を借りられるわけではない、外の地域から来て、誰の手も借りずに子育てしている人、シングルマザーの人もいます。バラバラな個人をベースに考えて、民主党政権は、例えば子ども手当で個々人を対象に再分配しました。お金を渡すだけではなく、流動的な個人の状況を踏まえつつ、市民的、公共的な何か＝場を考えていくというのが、この本の最後に書かれていることにも繋がると思います。また今後、マツダ財団でも展開されていくことにも関連すると思いますので、ポスト家族、ポスト会社、ポスト商店街…、戦後社会的なものが崩れていく中で、どのように新しい公共圏を作っていくのか、を永田さんの親密圏の話と絡めてお願いします。

個人をベースにしながらどのように地域を考えていくのか

永田

結婚していない人の満足度が低い、という話があったと思います。第 1 部のスライドでは 36 ページ目とその前後ですが、女性が子育て・仕事をしやすい地域として三次市の結果が出て、福井モデルの例で説明されていました。データを素直に見ると、結婚していないオタク男子は不幸で、地元で結婚して親からの子育てサポートを受けている女性の満足度はとっても高い、と出ています。地元で就職して、婚活して、子どもが生まれたら三世代同居して子育てサポートを受ければそれで良い、というデータの読み方ができるわけです。本では家族主義だとか福井モデルを好意的に捉えていないように感じます。轡田さんにその辺りを聞いてみて、その後、私の話をさせてもらいたいと思います。

三世代同居の幸福モデルを促進することの問題

轡田

今、政府の少子化対策の中で三世代同居の推進に向けてリフォーム代を支援する、という項目があります。少子化対策メニューの上位にリフォーム代の支援が出てくるのは一体何でしょうか。実家が近くて子育てを手伝ってもらえる、という環境は本当に良いの

で、否定するつもりはなく、幸福モデルの 1 つだと思います。しかし、政策でそればかりを後押しするのはどういうことかと思ってしまいます。私自身は、5 歳の双子を抱えながら共働きですが、実家から離れて暮らしていて、こうした政策の恩恵は受けられません。統計的に見ると、私のように実家が近くない人も結構多く、子育て環境に不満が大きい結果となります。そのような現実に目を向けよう、ということです。

永田

今の轡田さんの地元ではない所に流入された人の話、とは少し違いますが、私の専門の妊娠先行型結婚の話をすると、U ターンで戻ってきた層でも家族主義的なやり方はよろしくない、と思います。従来通りの家族を作れるように後押ししていけば生活満足度も上がるし、少子化対策にもなるから良い、というのを私は良いとは思わない。うまくいっている間はそれで良いですが、こじれてしまった場合に、一気に社会的生活資源がなくなってしまうという問題があるからです。親に子育てを全面支援してもらっていたり、同級生のネットワークで仕事を回していたり、と狭い範囲で生活していると、何かあった場合どうなるのでしょうか。選択肢に乏しいので対応の多様性が失われてしまいます。家族研究はこの観点で行き詰まっている面があります。家族主義的なライフスタイルが取れる人は家族を作りますが、できない人は家族を作らないことになってしまう。今や家族を作る資源を持っている人たちがどんどん減っているので、結果として家族を作ることが難しくなってきています。未婚化・晩婚化が深刻になっている状況を考えていく中で、「新しい親密圏」という話が出てきます。親密圏は、その人の存在をサポートする、目にかける、というニュアンスの言葉でイメージして下さい。今の話だと家族だけになりますが、そうではなく他にも居場所を提供していくような話ができれば、というのが「新しい親密圏」です。シェアハウスだとか、部分的な話になると子ども食堂だとかが考えられます。犯罪をした少年が戻ってきたとき、福祉ボランティアや NPO を受け皿にする活動もあり、展開が広がれば良いな、という思いはあります。ですが、選択肢をどんどん増やしましょう、と牧歌的に考えていいのかな、という思いもあります。親密圏的なつながりネットワークは、「一緒にいて落ち着く」とか、「そりが合う」といった観点で形成されていきます。これは、居心地が悪くなったり、話が合わなくなったりすると、居場所がなくなってしまいます。ママ友を例にするとイメージしやすいと思います。たまたま公園に集まった人たちがしっくりこない場合、居場所を求めてホッピングしていくこ

地方に「新しい親密圏」は可能か？

とになります。小さな地方都市は人口が少ないので、家族以外の親密圏だけを頼りにするとどこにも馴染めなくて浮いてしまう人が出てきてしまいます。難しい課題ですが、そのような人たちの解決の糸口を議論していきたいです。

阿部

話がトントンと進んでいったように感じるので、私なりにまとめてみます。かつて自民党の「家族でいこう」という方向性は、みんな家族を形成して家族というチームで生き抜きましょう、というイメージでした。家族単位でお金を出すという伝統的な日本のモデルです。永田さんがテーマに出された新しい親密圏は、かつて民主党政権がやっていたことでしょうか。「新しい公共」を一時期全面展開し、家族ではない、別のところで公共圏を作ってそこで協力し合いましょう、と打ち出しました。ですが、家族以外の親密圏って何だろう？お金使って一体何しているんだろう？と支持を得られず、自民党が「家族モデル」に戻そうとしている、といったところでしょうか。

永田

新しい親密圏って難しいですよね。家族の方が簡単というか分かりやすいです。みんな何となく常識的に理解できます。常識的に知っている、というのは社会の制度として一番強固で、一人一人に説明が要らない。家族の仕組みから外れるのは案外難しいです。

阿部

老人ホームへ出向いて調査をすることもありますが、おばあちゃんは、初対面の人とでも何となく仲良くなることが多いです。これは新しい公共圏です。でもおじいちゃんは孤独を感じて自室に戻ってしまう。男の人は仕事一筋で過ごしたせいか、公共圏を作るのが難しい傾向にあります。女の人はママ友等を通じて、新しい公共圏を作ることに慣れています。上野千鶴子さんが『男おひとりさま道』を書いたりしていますが、人は慣れたものはすんなり受け入れられるけど、頑張って公共圏を作っていくのは、しんどい面があります。今後に向け、新しい公共圏、親密圏を作るにはどうしたら良いのか、を轡田さんお願いします。

轡田

人をつなぐ役割を果たすキーパーソンを支援する

「シェアハウス」とか「新しい公共」にはカッコいいイメージが先行しすぎたように感じます。都会的なイメージですよね。今日も来て下さいましたが、私のフィールドで出会った人たちにも、そのような

ことをされている方がおられますが、もっと柔軟な形態です。不登校児やひきこもりの支援から始まって、徐々に活動を広げています。自分の子どもの問題だけではなく、地域の子育ての問題、悩んでいる人たちと繋がって幅を広げています。取り組み始めたばかりの制度や形態を限界があるとか、失敗だったと結論を急がない方が良いと思います。特に地方は、制度ではなく、属人的な要素で動く要素が大きいです。パワーのあるキーパーソンが抜けたら活動が止まってしまうのは仕方ない。人をつなげたり、色々なニーズを持った人たちを調整したりするキーパーソンが燃え尽きないように、そういった人を直接に支援していくのが方法の 1 つかもしれません。NPO と言ってしまうと、制度的なものが強く出てくるので、柔軟に捉えて、対話だとか、居場所づくりをしている人に投資をしていく、応援していくことが必要かもしれません。その人たちが自分たちだけで動き続けると煮詰まることが出てくるので、異なる団体、異なる試み、異なる地域の人が集まって学び合う、そのような動きを強く支援していく必要があると思います。つまりマツダ財団さんに期待しています、ということです。

阿部

見事にマツダ財団の活動に繋ぎましたね（笑）。限界があると諦めるのは早すぎるということですね。最初は失敗するかもしれないけれど、いろいろなアプローチをやってみよう、ということだと思います。未来の地域を明るくするために他にも例があるのでしょうか。残り時間が 10 分程度となりましたが、フロアのみなさんからご意見、ご質問はありますか。

（フロアと後継者問題等について意見交換、その後マツダ財団の新規事業についての話に…）

マツダ財団の新規事業について

川端

地域の問題を1人で考えていくのは限界があります。色々な働き方の人がその場に一緒にいて話をするのが大切なことですので、この新規事業では、大企業と複数の小さい団体が組んでいて良いと思います。

永田

これまでの家族社会学は、古い考え方を捨てず、新しく出てきた選択肢をするかしないか、だけを続けてきました。団塊世代は兄弟が多いので長男が実家を継ぎ、二男以降はライフスタイルを選択できましたが、人口減が起き、今や状況は変わっています。その

ような中で何ができるか、となると、誰もが知っている企業や組織、つまり信頼が担保できる組織が旗振りすることが1つの突破口になると思うので財団の新しい事業は良い場になると期待しています。

阿部

新しい家族や地域の形に向かっていこう社会の流れにもなっているので取り組まれる活動をぜひ進めて欲しいと思います。

轡田

外と繋がりたい若者、表現したい若者を応援したい、というマツダ財団の姿勢は応援したいと思います。大切なのはそのような活動に入れない若者の存在です。活動は参加することが大切なのではなく、参加して他者を知る、他者を想像する、が重要です。色々な組織をただ盛り上げるだけでなく、異なる存在に気づき、違いが何かを学んでもらうように対話につなげて欲しいと思っています。やり方は色々あると思いますので是非継続して取り組んでください。

Ⅲ．オープニングセレモニー開催概要

マツダ財団　新規事業オープニングセレモニー
「若者×ツナグバ」Vol .1 !!

-入場無料・予約不要-

日時　平成 29 年 3 月 24 日（金）13 時 00 分～20 時 00 分
場所　イオンモール広島府中 1 階　スターギャラリー（安芸郡府中町大須 2-1-1）
主催　公益財団法人マツダ財団
後援　府中町/ 府中町社会福祉協議会/ 三次市/ 三次市教育委員会
協力　イオンモール広島府中、府中町地域活動青年団体「志楽蝶」、NPO ほしはら山の学校、NPO 法人三次おやこ劇場子育てフリースペース KADOYA、コスカレード実行委員会、C（エンターテイナー）、物怪プロジェクト三次
来場者数　100 名

プログラム）
午後 1 時～　オープニングセレモニー（MC 担当　竹下ひかり）
・開会あいさつ
・「若者×ツナグバ」の紹介
・十輝　ライブ
・府中戦士　ツバキマンショー
午後 2 時～　オープニング記念イベント
・コスプレイベント
・館内謎解き
・ゲーム大会
午後 7 時～　閉会式
・「若者×ツナグバ」の今後
・閉会あいさつ

（参考　開催案内のチラシ）

志楽蝶
SHIRAKUCYO
×
子育てフリースペース
KADOYA
×
NPO法人
ほしはら山のがっこう
若者メツナグバ
Vol.1
公益財団法人マツダ財団
青少年健全育成関係
十輝
SPECIAL LIVE
13:15~
3.24[FRY]
13:00~20:00
イオンモール広島府中
1階 スターギャラリーほか
OPENING CEREMONY
ツバキマン
ヒーローショー
~ゴーマンと妖怪の謎~
13:45~
and
三次稲生物怪
妖怪謎解き
ALL TIME!!
コスカレード
Cosquerade
ALL TIME!!
アナログゲーム大会
C・エンターテイナー
ALL TIME!!
主催: 公益財団法人マツダ財団
後援:府中町、府中町社会福祉協議会、三次市、三次市教育委員会
協力:イオンモール広島府中・府中町地域活動青年団体 志楽蝶
NPO法人ほしはら山のがっこう
NPO 法人三次おやこ劇場子育てフリースペース KADOYA
コス レード実行委員会・C(エンターテイナー)・物怪プロジェクト三次
問合せ先: マツダ財団 事務局 TEL 082-285-4611(平日 9:00~17:00)
コスプレに関するお問い合わせは、コスレード実行委員会
TEL090-3372-1479 担当:河口(こうぐち)
*コスプレイヤーさんを撮影する際は事前にご本人の許可を得てください。
*ネットに UP するときも事前に被写体ご本人の許可を得てください。

（マツダ財団 新規事業）「若者×ツナグバ」とは？

若者へのメッセージ

あなたは今、様々な格差や困難の中に生きているかもしれません。そんな世の中を冷静に見回した上で、「希望を持つなんてムリっぽくない？」と感じて、あえて希望を追い求めたりせずに、日々を過ごしていたりしませんか？

でも、周りをもう一度よく見渡してみて。いろんな人がいる。いろんな考え方がある。そんな中で、ある日ふとしたきっかけでできた「つながり」から、全く違う真実が見え始めたとしたら…それは「希望」につながるかもしれません。

このように、いつもの仲間、新しい友達などと「交流」を積み重ねて信頼感を育てたり、お互いの違いを受け止めつつ「対話」をしながら、多様なかたちでの「つながり」をつくること。そうした場をわれわれは「ツナグバ」と呼び、大切に育くんでいきたいと思っています。

さあ、みなさんもこのリアルな手触りのある仲間づくり「若者×ツナグバ」に参加してみませんか♪

●「若者×ツナグバ」誕生の経緯

マツダ財団は，マツダ株式会社によって1984年に設立された公益財団法人です。科学技術の振興及び青少年の健全育成に関する様々な事業を進める中で、ある時ふと思ったのです。「若者は希望を持てているだろうか？」と。広島県内（府中町・三次市）の若者の実態調査も含めた長い検討の末、マツダ財団は「若者のための事業を新たにスタートさせよう！」と決心しました。それが、（新規事業）「若者×ツナグバ」です。

●何をするのか

「若者×ツナグバ」では、若者が希望を持つきっかけとなる活動の支援を、市民活動団体との連携で展開していきます。初年度は、「志楽蝶」「ほしはら山のがっこう」「三次おやこ劇場子育てフリースペース KADOYA」の3団体とマツダ財団がタッグを組みます。

ところで、そもそも「希望」って何なのでしょうか？それは、「行動によって 何かを 実現しようとする 気持ち（玄田：2010）」と言い換えることができるようです。そこで我々は、若者が希望の 4 柱（行動・対象・手段・情熱）を獲得するための手段として、対話、表現活動、居場所づくり等の活動を応援することにしました。

各団体で以下のような活動をスタートしますので、ぜひあなたもご参加ください！

2017 年度参加団体

府中町地域活動青年団体「志楽蝶」	NPO 法人 ほしはら山のがっこう	NPO 法人三次おやこ劇場 子育てﾌﾘｰｽﾍﾟｰｽ KADOYA	公益財団法人 マツダ財団
イベント協力等を通じ、若者ならではの視点で地域の改革に取り組もう！若者の新たな居場所「志楽蝶 BASE」を作ろう！メンバー＆居場所の物件情報も募集中！	「ワカモノ×コドモの自然学校」の企画＆実行を通して、仲間づくりと社会貢献、そして新しい自分と出会うプロジェクト。ぜひあなたも参加してください！	若者が気軽にふらりといつでも立ち寄ることができ、本音で語り合え、自由を感じる居場所、オープンカフェ風「Folks Tea Booth」をみんなの手で作ろう！	「若者×ツナグバ」ネットワークのハブとして、交流・記録・イベント等の運営を推進します
◆Mail・公式サイト等◆ shirakutyou@gmail.com shirakutyou.wixsite.com/home	◆Mail・公式サイト等◆ hoshihara@twoone.net www.hoshihara.org	◆Mail・公式サイト等◆ kadoya@angel.email.ne.jp	◆Mail・公式サイト等◆ mzaidan@mazda.co.jp http://mzaidan.mazda.co.jp/

交通アクセス

●JR で
広島駅よりひと駅。JR 山陽本線天神川駅から徒歩 5 分

●シャトルバスで
シェラトンホテル前⇔イオンモール広島府中
ノンストップ運行・約 15 分おきに出発

●お車で
「広島高速 2 号線」でお越しの場合
広島東 IC・温品方面からお越しの場合は、府中 IC より下車
呉方面からお越しの場合は、大州 IC または矢賀 IC より下車

会 場

Ⅳ．オープニングセレモニー開催記録

午後１時～　開会式

開会，ごあいさつ

司会（竹下）

みなさんこんにちは。これから、「若者×ツナグバ Vol. 」のオープニングを始めます。私は、司会進行を務めさせていただきます、竹下ひかりと申します。最後までよろしくお願いいたします。

今日のイベントは、自動車メーカー マツダが設立しましたマツダ財団が 4 月から若者のための新しい事業「若者×ツナグバ」をスタートさせるための発足記念イベントです。今日の主役は「若者」ですので、この後、アメリカ横断の旅から帰国したばかりのシンガーソングライター十輝さんのライブ、府中町が生んだヒーロー 府中戦士ツバキマンのヒーローショー、コスプレイベントがあります。そして 2 時からはイオンモール館内全体を使った館内謎解き、があります。ステージ前ではオトナのゲーム大会を開催します。どなたでも参加できますので、お買いものの合間に是非お立ち寄りください。

それでは本日のイベントの主催者、マツダ財団よりみなさまにご挨拶をいたしますと共に、「若者×ツナグバ」って一体何なの？という説明を申し上げます。では、マツダ財団 魚谷滋己常務理事・事務局長、どうぞこちらへお願いいたします。

マツダ財団常務理事（魚谷）

マツダ財団魚谷でございます。マツダ財団は先ほどご案内がありました通り、車のマツダの寄付金を基に 33 年前に設立されました。事務所はマツダ(株)の中にあります。広島県や山口県を中心に社会貢献活動に取り組んでいます。より良い世の中になるようにと日々考え、色々な人に協力していただいたり、協力したりしています。本日のオープニングセレモニーもその 1 つです。

イベント開催にあたり、「若者×ツナグバ」がどのようなものなのか紹介いたします。若者を取り巻く環境は非常に厳しいと言われて久しいです。先を見ましても経済成長はないし、年金も不安だし、支えていくお年寄りはどんどん増え、負担は増える一方です。明るい話を聞くことがありませんね。そんな中でも将来の日本を支えていく若者には希望を持って欲しい、と我々は思っています。でも我々は残念ながら若者の現状を知りません。それで三次市と府中町で若者に対してアンケート調査を行いました。吉備国際大学で若者研究を専門にしている轡田竜蔵先生に詳しく分析してもらいました。それから、少しですが、若者に直接会って話を聞きました。今の若者は情報を十分に持っています。自分自身についても、取り巻く環境についてもしっかりした考えを持っています。ただ、考えが自分 1 人の中で完結して、自分を納得さ

せているように感じます。もっと外に出よう、もっと人と話そう、もっと人と繋がろう、と思っています。我々が出した結論が、今日オープニングを迎えるこの「若者×ツナグバ」です。一言で言うと、若者同士の繋がりを増やすことが目的で、そのために若者の対話・表現活動・居場所づくりを支えていく事業です。つながりが増えると、色々な考え方に出会えると思います。自分の人生の選択肢が増えます。それは、自分の潜在能力が増す事であり、希望が持てることに繋がるのではないでしょうか。

「若者×ツナグバ」は、4 月から 3 つの団体が独自に活動しながら、緩やかに連携しながら展開していきます。三次では2つの団体、三次おやこ劇場KADOYAさん、ほしはら山のがっこうさんです。府中町では 1 団体、志楽蝶さんです。今回のオープニングセレモニーは「若者の若者による若者のための」イベントと考え、志楽蝶さんに中心となって考えてもらいました。また、こちらイオンモール広島府中さんは、府中町の若者だけでなく、三次の多くの若者も週末を使って来ている場所です。これらは先ほどお話しした調査から分かりました。府中町と三次市の若者のカギを握る拠点として、オープニングセレモニーは絶対イオンモール広島府中で開催しようと考えました。イオンモール広島府中様には会場の提供を始め、ひとかたならぬ配慮をいただいております。この場を借りてお礼を申し上げます。ありがとうございます。これから始まるセレモニーの中心、コスプレに関しては、「コスカレード実行委員会」の皆さまの協力がなければ、実現しませんでした。お礼を申し上げます。本当にありがとうございます。私の着ている衣装ですが、三次市に 250 年以上前から伝わる妖怪で『稲生物怪録』に出てくる髭手の大入道です。今日は三次の「物怪プロジェクト三次」から平太郎と物怪たちが出張で来ています。他にも歌手の十輝さん、エンターテイナーCさん、などなど本当に多くの方の協力をいただき、感謝を申し上げます。長くなりましたが今日はみなさん、大いに楽しんで頂き、色々な人とつながっていただきたいと思います。本日はどうぞ宜しくお願いいたします。

司会（竹下）

マツダ財団 魚谷滋己常務理事・事務局長ありがとうございました。

みなさんは、自動車メーカー マツダはご存じだと思います。ただ、マツダ財団って聞いたことがありますか？私も知らなかったんですが、今挨拶にあったように若者を大人が助けて下さるというのは、すごく心強いことだな、と思いながら聞いていました。今日は、挨拶にあったようにみなさん思いっきり楽しんでいただいて、周りの方とつながっていただければと思っています。

ではこれからスペシャルライブに移らせていただきます。これから登場される十輝さんは、23 歳で私たちと同じ若者です。おうちで教育されるということで、学校に通われていなかったという話を先ほど聞き、私自身はびっくりしています。16 歳で広島で音楽関係の活動を始めたそうですが、18 歳でなんとCD300 枚という偉業を達成し、しかも、インド各地の学校で「ヒロシマ原爆展」を開催されたそうです。それからまたびっくりしたんですが、19 歳、まだ成人していない 19 歳の時に全国 47 都道府県ヒッチハイクの旅を成功させています。そんな十輝さんは新しい人と出会いながら、新しい経験を積んでこられました。そんなシンガーソングヒッチハイカー十輝さんのライブを聴きながらみなさんも繋がりを増やしていく勇気をチャージしていただければと思います。それでは十輝さん宜しくお願いいたします。

・十輝　ライブ　（シンガーソングヒッチハイカー　清水十輝氏）

森山直太郎のさくらを含む 3 曲を披露。

司会（竹下）

素敵な歌声をありがとうございました。十輝さんは年齢よりも年上だと思っていました。なんでそんなに人間としての安心感があるのかな、と考えたら、今のお話やライブを聞いていて、経験だったり、今日のイベントもそうですが、人との繋がりを持っているから、なんだなと思いました。みなさんも今日の様々な企画を是非ツナグバにしていい経験を積んで帰ってほしいな、と思います。恥ずかしがらずにご参加ください。さて、ここからは府中戦士ツバキマンショーです。

・府中戦士　ツバキマンショー　（志楽蝶）

若者手作りのヒーローショーを披露。

MC: さて、突然だけどみんなは府中町で活動しているヒーローの府中戦士ツバキマンを知っているかな。府中町にはゴーマンっていう悪い怪獣がいるんだけど、それをツバキマンがやっつけてくれるおかげで府中町の平和は守られているんだよ。今日は正義のヒーローツバキマンがこのステージに来てくれました。さっそくツバキマンを呼んでみよう。

（中略）

格闘の後、正義のヒーローツバキマンが悪い怪獣ゴーマンを撃退。だが、、、

MC: 今日はツバキマンのお蔭でゴーマンたちを撃退することができたよ。ありがとう。

ツバキマン: いやぁ、危なかった。みんなの応援のお蔭で一時は退ける事ができたけど、あいつらはもう一度来ると言っていた。こちらも誰かの力を借りなければ。そうだ！三次の妖怪と言えば、妖怪の訪れを30 日間も耐えきった平太郎という男がいたはずだ。彼の力を借りるんだ。

MC: 30 日間も？すごい。

ツバキマン: あぁ、しかし用心深い男と聞いている。彼と仲いい妖怪と一緒に行く必要があるだろう。そうだ、みんなでツバキマン Jr.と三次の妖怪に変身して彼を説得しに行ってくれないか。もう 1 つ、妖怪の力を借りるには妖怪の謎を解かなければならない。この場所で妖怪の力がゴーマンたちに使われているということは、きっとこのイオンモール内に妖怪の謎が隠されているはずだ。みんなでツバキマン Jr.と妖怪に変身してイオンモール内に隠された妖怪の謎を解き、平太郎の力を借りて欲しい。そうすればゴーマンたちを倒せるぞ。

MC: みんな力を貸して。

ツバキマン: 俺は一旦戻って態勢を整える。みんなまた後で会おう。

MC: また後でね。ツバキマンかっこ良かったね。ゴーマンがもう一度来るって言ってたけど、それまでに私たちの力を溜めなくちゃ。みんなで謎を解いてゴーマンに立ち向かおう。謎解き用紙は、謎解き受付に用意されているのでお兄さんかお姉さんに声を掛けてね。じゃあね。

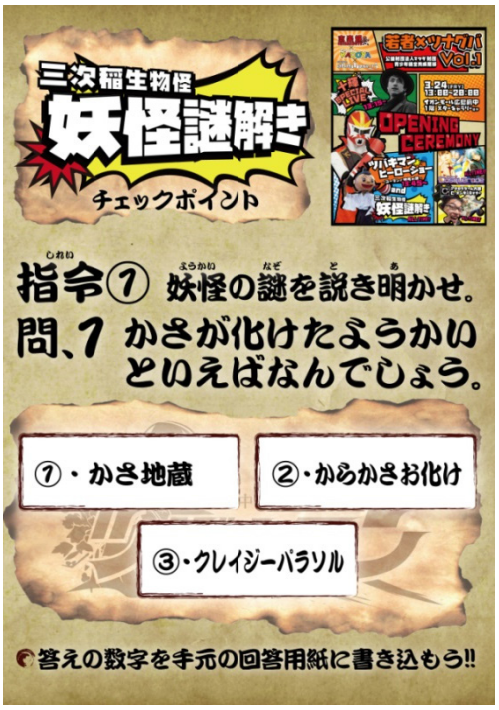
司会（竹下）

それではここからは、ツバキマンを助けるために館内謎解きが始まります。みなさん、是非挑戦してください。館内に散りばめられた三次に伝わる妖怪伝説『稲生物怪録』の謎をみんなで力を合わせて解きましょう。いつでも誰でも参加できます。（-謎解き、景品の説明）

ミッション達成のコツを１つお知らせします。それは今日のイベントのテーマである「つながる」ということです。謎解きの参加者は、お面を持っています。いくつか種類があるんですが、自分の 1 つのお面だけだと謎が解けないんです。参加者同士、謎解きの最中は、初対面でもみんな仲間。「ちょっと協力して」って声を掛けあって、早くミッションを達成しましょう。それでは館内謎解きのスタートです！

午後２時～　オープニング記念イベント

・館内謎解き　（志楽蝶）



・大人のゲーム大会　（エンターテイナーC）

司会（竹下）

ステージ前ではゲーム大会を開催します。今まで見た事のないボードゲームに出会えるかも。ルール説明もあるし、誰でも 1 人からでも参加できます。人数が揃わないとできないから、知らない人同士でもOK！是非ご参加ください。

・コスプレイベント（コスカレード）

・若者×ツナグバ　参加団体紹介ブース　（府中町地域活動青年団体「志楽蝶」、
NPO 法人ほしはら山のがっこう、
NPO 法人三次おやこ劇場）

午後 7 時～　閉会式

司会（竹下）

みなさん、今日はたくさんつながっていただけましたでしょうか。それではここで、色々な人と出会いながら、新しい経験を追い求めてきたシンガーソングヒッチハイカーの十輝さんをお呼びしたいと思います。十輝さん宜しくお願いいたします。

・十輝　ライブ（シンガーソングヒッチハイカー　清水十輝氏）
秦基弘のひまわりを含む 4 曲を披露。

十輝：歌の合間に幸せを語っていただきたいと思います。本日お集まりの中から3名様限定で手を挙げて語っていただきたいと思います。すぐに手が挙がらないようですので、こちらから指名させてもらいます。あ、9 割の方が目を逸らしましたね。先ほど話をさせていただいたあちらの倉敷から来られた方。時間を費やして何のためにここにいるのか？語っていただきましょう。小さな幸せ、大きな幸せをどうぞ。
轡田（若者調査を依頼した吉備国際大学の先生）：・・・
十輝：それでは今の方には 2 番目に語っていただくことにしましょうか。最初に語ってもらう方を指名しましょう。一番前に座っている僕、お願いできるかな。
少年：ヒーローショーが見られたこと。
十輝：幸せを語ってくれた小さな僕に大きな拍手を！ありがとう。それでは、しっかり考える時間を確保した先ほどの、遠く倉敷から来られた方、どうぞ。
轡田：私が、府中町や三次市で若者を調査したことがきっかけとなって、みなさんの力で今日のイベントが

あるんだと思います。すごく不思議な気持ちで幸せです。

十輝:え？そうなんですか？恐縮です。幸せを語っていただいてありがとうございます。大きな拍手を！あと 1 人、私こそは、という方？・・・おられませんね。では、先ほどから緑のカッパ衣装がとってもよく似合っていらっしゃった方、宜しくお願いいたします。

世良（財団員）:緑のカッパを初めて着る事ができて嬉しかった。そしてこの緑色が、こちらの可愛い司会の竹下ひかりちゃんと全く同じ色だったということが恐縮で、幸せです。

十輝:大トリありがとうございます。みなさん幸せの分かち合いどうもありがとう。そしてこの後もツバキマンショーがありますので楽しんでいって、お近くのみなさんとたくさんつながってください。

司会（竹下）

十輝さんありがとうございました。お昼も今も十輝さんが「小さな好きはありますか」って聞いてくれましたが、この「小さな」が大切なんじゃないかと思います。小さな好きがたくさん集まったら十分幸せではないでしょうか。「小さな」好きを探す心をみんなに忘れてほしくないですし、私も忘れないでいようと思います。

この「若者×ツナグバ」Vol. 1 も開始から 6 時間以上経ちますが、いよいよ閉会式に向かいたいと思います。まずは、ツバキマンショー後編のスタートです。オープニングの時にパワーが足りなくてゴーマンが倒せなかったツバキマン。みんな、ツバキマンを助けるために館内謎解きに挑戦してくれたかな。さあ、みんなでツバキマンを呼ぼう。

・府中戦士　ツバキマンショー　（志楽蝶）

MC:お昼はゴーマンっていう悪い怪獣が襲ってきて、ツバキマンは今ゴーマンを倒すために力を溜めているところなの。館内謎解きをしながらみんなが平太郎に力を借りに行ってくれたお蔭できっとゴーマンを倒すことができるはず。みんな応援よろしくね。

ツバキマン： 府中町に悪がある限り、戦い続ける正義の戦士、咲かせてみようツバキの花。府中戦士ツバキマン参上！
（中略）

格闘の後、ツバキマンが悪者を完全撃退。

閉会，ごあいさつ

司会（竹下）

みなさん、ツバキマンショーはいかがでしたでしょうか。みなさんのお蔭でツバキマンもパワーアップできました。それではそろそろ本日の「若者×ツナグバ」も終わりに近付いてきました。ここで、本日のイベントの主催者、マツダ財団より「若者×ツナグバ」の今後について説明するとともに、閉会の挨拶を申し上げます。ではマツダ財団の魚谷滋己　常務理事・事務局長、どうぞこちらへお願いいたします。

マツダ財団常務理事（魚谷）

みなさん、こんばんは。マツダ財団魚谷でございます。今日は午後 1 時から今まで長時間お付き合い、いただきありがとうございました。この「若者×ツナグバ」はこの 4 月から新規事業としてスタートします。実は、4 年ほど前からマツダ財団は若者のために何かしたい、と考えていました。若者を取り巻く環境はどんどん悪り、経済もなかなか良くなりません。それでも将来の日本を支えていただく若い人たちには希望を持って欲しいな、と切に願っています。府中町と三次市での 900 人の若者のアンケートの声を聞き、吉備国際大学の若者研究をされている轡田先生に分析もお願いしました。若い人に直接会って声を聞いたりしてきました。オープニングでもお話ししましたが、今の若者は情報を十分に持っています。自分自身についても、取り巻く環境についてもしっかりした考えを持っています。ただ、考えが自分

1 人の中で完結して、自分を納得させているように感じます。もっと外に出て欲しい、もっと人と話して欲しい、もっと人と繋がって欲しい、と思っています。そこからこの「若者×ツナグバ」が誕生しました。4 月からは 3 つの団体の独自活動を緩やかに連携して活動を支援していきたいと思います。今日のこのイベントはそのうちの 1 つ、府中町「志楽蝶」という平均年齢 23 歳の非常に若い団体に企画をお願いしました。

今日のオープニングセレモニーをどうしてイオンモールで開催することになったのか、を少しお話しします。調査の結果、府中町の若者は頻繁にこちらを利用しています。実は三次市の若者も大半が週末にはイオンモールに来ています。この結果をイオンモールさんにお話ししたところ、こちらのスターギャラリーを無償で提供いただく運びとなりました。本当に感謝しております。コスプレを運営いただいた「コスカレード実行委員会」様、長時間ゲームを案内してくれたエンターテイナーC 様、先ほど歌っていただいた十輝様、司会をし続けて下さった竹下ひかり様のお蔭で素晴らしいオープニングセレモニーとなりました。最後になりましたが、マツダ財団の「若者×ツナグバ」を頭の隅に入れていただき、若者のみなさんを見守っていただければと思います。ありがとうございました。

司会（竹下）

ありがとうございました。今日はイオンモールで新しい人とつながり、新しい経験はできましたか。考えるところがあると思います。思ったようにできなかった人もいるかもしれないし、逆にできないかな、と思ったけど、思ったよりは簡単にできた、という人もいるかもしれません。それぞれだとは思いますが、今回は Vol.1 ということで 1 回だけではうまく変われないと思うんですね。うまくいった人はもっと楽しく過ごすためにまた来ていただきたいと思いますし、うまくいかなった人もまだまだチャンスはあると思います。是非次も遊びに来ていただければと思います。それでは、また Vol.2 でお会いしましょう。

以上を持ちまして本日の「若者×ツナグバ」のオープニングセレモニー閉会式を終了させていただきます。